AACK 京都大学学士山岳会 No.62

Newsletter

September 2012

http://www.aack.or.jp

目次

サルトロ・カンリ初登頂五〇周年記念座談会 …… 2
サルトロ・カンリ登頂五〇周年記念会のために　谷　泰 …… 20
サルトロ・カンリ、インドラサン登頂五〇年を祝う会 …… 23
一九六〇年代アーカイブスの収集整理について　アーカイブス作成委員会　酒井敏明 …… 24
西堀書簡について …… 26
会員動向 …… 27
編集後記 …… 28

サルトロ・カンリ初登頂五〇周年記念特集号

＊サルトロ・カンリ初登頂を前にした遠征隊員　7月16日C2にて
前列左より岩坪、斎藤、高村、平井、上尾、後列左より谷、加藤、バシール、ハイヤット、ペルベッツ、林。
（四手井隊長はABCに、前小屋隊員はビラフォンド峠を前にしたギャリに滞在のため画面には写らず）
＊のついた写真はAACKアーカイブ委員会収集の映像資料より

サルトロ・カンリ初登頂五〇周年記念座談会

ＡＡＣＫは五〇年前の一九六二年七月二四日、サルトロ・カンリ（七七四二ｍ）の初登頂に成功した。二年おきにチョゴリザ、ノシャックと続く快挙である。また同年秋には現役山岳部を中心としたインドラサン遠征隊も初登頂を果たした。同じ母体から同年に二度も初登頂を果たすことが出来た時代というのは、ＡＡＣＫ八〇年の歴史の中でも、最も脂ののっていたときであるといえるであろう。このサルトロ・カンリ遠征隊隊員一〇名のうちトップの三人は鬼籍に入られたが、残る隊員は幸い健在である。そこで初登頂五〇周年を記念して在欧の一人を除いたサルトロ隊員とインドラサン遠征隊の副隊長および、その後五〇年間にＡＡＣＫの遠征隊に加わったそれぞれの世代の代表を加えて、初登頂記念日直前の七月一一日に座談会を催した。ここでは、京大ならではの遠征成立の苦労話などの回顧談だけに終始せず、五〇年前の華々しかった活動のエネルギーがその後どのように次世代に伝えられたのか、そしてこれからのＡＡＣＫはどうあるべきかが話し合われた。世代をちがえた方々が一堂に会して話し合う機会は少ないと考えられるので、少々くどいところや、くりかえしは甘受して採録した。

座談会出席者

サルトロ・カンリ遠征隊隊員：斎藤惇生、平井一生、高村泰雄、岩坪五郎、前小屋端、上尾庄一郎

ＡＡＣＫ会員：酒井敏明、上田　豊、斎藤清明（司会）、松林公蔵、根岸哲生

京大山岳部現役部員（四名）

記録：前田司、天野貴子（土倉事務所）

会場　京都大学東南アジア研究所　稲盛財団記念館三階

＊この座談会には松林公蔵教授の高所医学のゼミとして六名の大学院生も傍聴された。

開会に先立ってＡＡＣＫアーカイブ委員会が収集した映像資料から抜粋されたサルトロ・カンリおよびインドラサンの映像を写しながら高村、酒井氏がそれぞれの遠征の概要を解説された。

司会（斎藤清明）：まずは自己紹介から

斎藤（惇生）：サルトロ・カンリの生き残りの最年長になりました。サルトロに行ったときは三三歳だったのですけれども、俺はもう死んで帰っても本望だと、そんな気持ちで出かけました。全身全霊をぶつけました。サルトロが終わった後、まじめに医者をやろうと思っていたのですが、許してもらえなくて（笑）。そのあとヒマラヤ遠征に八回も引っ張り出され……登山家としても医者としても中途半端に終わった感じがして、いま後悔しています。

高村：サルトロの前年、一九六一年は後期博士課程の二回生でした。登山許可がなかなか下りない頃の、楽友会館の会議で先輩のどなたかが、直接向こうに行って交渉されたらどうですかと言いました。それが効いたのでしょうか、四手井先生が行くからだれか若いメンバーも一人ついてゆけ。ということで、一九五八年のチョゴリザ遠征で現地経験のある私が、鞄持ち役で当時の西パキスタンに行き、半年かかって許可を取るのに協力しました。結果的にはラッキー、しかししんどい半年でした。これで私の役目は終わった、ドクターコースの後半なのでイネの実験に集中しようと思っていたのですが、やっぱり現場を知っているおまえが行かなあかんと言われまして、翌年本遠征に参加しました。結局、修士三年と博士課程在籍しましたが、修士で一年はチョゴリザに行っているし、博士の四年のうちは二回抜け、いまでいう博士課程は四年だけで単位認定してもらったことになります。おかげでその後、博士論文を完成するまでにだいぶ時間がかかりましたが、こういう若い時の経験は、やっぱりありがたかったなと思っております。

平井：サルトロ・カンリは斎藤（Ｙ）先生と高村、あと、日本とパキスタンのジョイントですから、バシールと、三人が登頂しました。私はその四年前（一九五八年）にチョゴリザの初登頂をさせてもらったんです。当時まったくヒマラヤの知識がなくて、高所に行けば顔が膨れてきますが―これはいろいろな内臓の変化で膨れてくるんですけど―ドクターがこれは栄養失調や、食糧係は誰やと。それが僕で。そんな知識で当時ヒマラヤに行っていました。チョゴリザが終わった後すぐ次の目標ということでサルトロ・カンリを選んだんですけど、許可がなかなか下りなくて、その

間紆余曲折があって四年後に実現しました。私はチョゴリザ、サルトロ・カンリ、シェルピ・カンリ、クーラ・カンリ等、結局五回ヒマラヤに行っております。全部未踏峰の山を狙って、隊員としてあるいは隊長として四回初登頂できました。

岩坪：当時二八歳でして、その年の二月に結婚いたしました。今年はいかんでもいいやろと思ってましたら、岩坪はノシャックに登っているから役に立つというので行かされました。今西錦司さんが我々のボスでして、ヒマラヤへ行きたいのだったら就職したらあかん、大学に残らんといかんで、と言われまして、ずーっと定年になるまで京大にいるという半生を送りました。ずーっと大学におるには勉強もちょっとはせんとおれんようになるし、昼は学問、夜は山登りでした。

座談会風景　7月11日東南アジア研究所内

前小屋：当時、隊員選考というのも問題がありまして、すんなり入れるとは思いませんでした。ともかくパキスタンの現地に行ったら隊に入れる可能性がより強くなるんじゃないかということで、パキスタンの国費留学生に応募したらなんとか通してもらいまして、当時京大の大学院生でしたけれども、パンジャブ大学の大学院に留学しておったわけです。もともとサルトロ・カンリばかりじゃなくてヒマラヤの地質と氷河を研究したいという希望がありました。隊に入れたのはよかったと張り切っておったのですが、隊がパキスタンについたときは残念ながら入院しておりました。ちょうど流行性肝炎が蔓延しておりそれに罹ったようなんです。林ドクターと斎藤ドクターが病院を訪れ、とにかく病院から出してもらって一緒に行った方がいいということでしたけれども、パキスタン側としては国費留学生になにかあっては国の威信にかかわるということで、なかなか出してもらえなかったんです。なんとかかんとか交渉して、名医が二人もいるから大丈夫だということで（笑）隊の後を追うことが出来ました。後半登頂隊員を第三キャンプで迎えることができたのは、自分としては隊の役に立つことが出来ず仕方がなかったけれども、よかったと今は思っております。

上尾：私は当時二四歳、最年少でした。薬学部の大学院でドクターコースに入ったところだと思いますが、隊員にしてもらうにはそれなりの工作も必要だったのですが（笑）、なんとか隊にもぐりこみました。私自身はヒマラヤはそのときが最初だったんですが、当時林さん、谷さんとともに最終キャンプまで荷揚げしてアタック隊を送り出し、次いで迎えたんですけれど、当時皆結構余裕があったように思います。第二隊をなぜ出さなかったのかというのが、そのときからずっとあとも疑問に思っていました。価値観の差かなというのを思ったこともあります。二年のちに山岳部現役の隊でネパールのガネッシュ―七二〇〇m近くの未踏峰―に行きました。この席にそのときの二〇歳の隊員の上田さんがいます。その後私は会社に就職して研究所に勤務していたときカンペンチンというチベットの山にAACKが初めて行くことになり、お呼びがかかって、クビにもならず大きな顔をして行ってきました。私が影響力を発揮できたこの二つの遠征隊のときには、サルトロのときの経験をいろいろ考えて、できることなら一人でも多くの人が頂上にいけるように苦心したと言えるのではないかと思います。

松林：カンペンチンは全員登頂でした。

司会：サルトロの隊員はここまでで、あと……

酒井：岩坪さんと一緒に一九六〇年にアフガニスタンのノシャックという山に行きました。その時は全員で六人、シニアの三人とジュニア三人、ジュニアの最年長が廣瀬さんが三〇歳、それと岩坪さんと私。その三人でノシャックに登路偵察ということで行ったん

ですね。ノシャックというのは、当時「山日記」というのが日本山岳会編集で毎年出ておったんですが、世界の高山表でノシャックが七四九〇m未踏峰としてある。それをＡＡＣＫの若い者が探し出して調べられる範囲のことは調べたうえで、遠征隊を出そうと。しかし七五〇〇mに近い未踏峰だから、一回の隊で登れるとは当時考えられていませんでした。それで登路偵察隊として六人が出された。登路が見つかったら翌年、大メンバーの登山隊を送り出すということで一九六〇年に行ったんです。ところが我々が登路を偵察して下りてきたところへ、思いもかけないポーランド人の隊が大挙してきたんですね。そうしますと我々は登路は見つけたが帰っていき、登るのは後から来たポーランド隊ということになっては困りますので、六人のＡＡＣＫ隊と一二人のポーランド隊が談合をしまして、できたら一緒に頂上まで行こうと。しかし彼らは高所適応が間に合わないから、やむを得ないからあなた方は先に来たのだから、行ってください、という形で友好的に話はまとまった、というかまとまらなかったけども我々が先行することに何ら反対しないという形で、我々が二人、岩坪と私が登って、一〇日のちにポーランド人は七人が登った。ポーランド隊もはじめは、一人か二人誰か登頂したらいいということで国を出てきたんですけれども、着いてみたら日本人が先に登ったというんでは、たった一人か二人登ったのでは恰好がつかない。したがってなるべく大勢の隊員が登るために途中で作戦を変えたと思います。我々が作った最終キャンプより五〇〇mくらい高いところに彼らの最終キャンプをあげまして、一〇日のちにそこから八人登って、うち七人が登頂した。私はその経験があったものですから、その二年のちの小野寺先生のインドラサン隊の時に、あの男は副隊長として相応しかろうということで入ったということなのです。

上田：ガネッシュ隊の上田です。僕が京大山岳部に入部した年にサルトロ・カンリとインドラサンの登頂があったので、私にとっては入部五〇周年です。その二年後にサルトロ隊から上尾さんを副隊長に迎えて、京大アンナプルナ南峰（ガネッシュ）遠征隊へ行きました。一九七三年にはサルトロ隊の斎藤（Ｙ）さんと一緒にヤルン・カンに行って頂上に登りました。

松林：サルトロの一九六二年といいますと私は一二歳で、チョゴリザの時は八歳でしたから京大の登山のことは知りませんでした。中・高一貫の暁星という東京の学校の山岳部に入って、山岳部長の生物系の先生から探検・登山ならば京大の海外遠征がすごいということを教えられました。山岳部に入りたいと思って京大を受験しました。現役受験の一九六〇年は東京大学の入試が中止となり、東大医学部志願者の多くが京大を受験し、結局私は不合格で悔しい思いをしました。翌年に入部しましたが、山岳部現役時代私はヒマラヤに行く機会はありませんでした。卒業して医師となって二年目の一九七九年に関西学院大学山岳部遠征隊の隊付き医師としてカラコルムに行かないかという話があり、医師としての研修期間でもあり迷いましたが、一度ヒマラヤに登れればあとは医学に精進できるであろうと考え、思い切って参加しました。しかしこのときは全員が登頂できませんでした。私にとって「ヒマラヤ初登頂」は将来に持ち越された格好になりました。それ以降一九八二年に上尾副隊長のもとでカンペンチンに、一九八五年の春にナムナニ、秋にマサコンとたてつづけにヒマラヤ初登頂者となる幸運に恵まれました。一九八五年はヒマラヤのために一年間医師を休んだことになります。一九九〇年にはシシャパンマの八〇〇〇mに医学の研究登山、最後は一九九六年に梅里雪山の再挑戦、合計六回ヒマラヤ登山を行ったことになります。残念ながら私のヒマラヤは最初と最後が登れていない。しかし登頂とは別の高地における医学研究フィールドを発見し、高所住民を対象とするフィールド医学研究を、現在に至るまで大学院生たちとともに継続しております。もしもヒマラヤに触れていなければ、私の医学人生は大きく異なったと思います。

司会：一九六二年―五〇年前―当時私は高校生で、サルトロがあり、インドラサンがあり京大山岳部ってすごいなあという印象を持ったので、そのまま京大に行って山岳部に入ろうという気持ちになったのを思い出しました。一九六二年というのはＡＡＣＫとしてはチョゴリザ、ノシャック、つづいてサルトロという大きな山登りを一年おきにし遂げるという壮挙があったとともに、現役の山岳部員

によるはじめてのエクスペディション―すごい岩登りをやった、非常に盛り上がった年だったと思います。五〇年後の今もう一度振り返って話をしてもらおうと思うんですけれども、そもそもサルトロ・カンリなんですけれども、その四年前にチョゴリザがあってそのときからすでに目をつけていた山でしたよね。それがなかなかパキスタン側の許可が出ないということで、たいへん苦労をしたと。それでその間にノシャックの登頂があって、これも臨機応変に登った壮挙だと思うんですけれども、そういう意味でAACKの山岳の実力が十分ついていたわけなんですけれども、結局サルトロ・カンリの許可を取るというときに、すごい交渉力というか政治力というのを使った。当時の池田首相まで使ったという、いかにもAACKらしいというか、AACKにしかできないという交渉力があったと思います。そもそもの許可を取って行くまでの話を高村さんお願いします。

登山許可の取得作戦

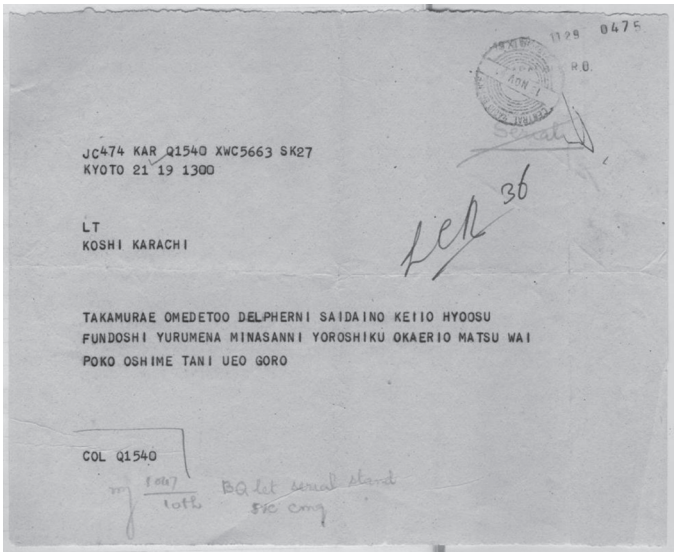
高村：サルトロ・カンリという話が最初に出たのはチョゴリザのときで、チョゴリザからは西面の岸壁と頂上を見たとき、岩壁サイドが見えたんですよ。

平井：加藤泰安さんが―ゲントをサルトロやと勘違いしていたんですけど―登れそうやからあれにしようと。あとで違うとわかった。その時から話題にはなっていた。

高村：サルトロは一九五三年の英国エベレスト隊の隊長をやったジョン・ハントさんが若いころに行っています。アプローチが悪く、ベースキャンプを作るのにも難儀して、結局高度七〇〇〇メートルで撤退した山です。しかし四手井綱彦先生が現地交渉に出かけることになり、その露払いに六月に出発した私がはじめに持っていったのはガッシャーブルムⅢの書類だったんです。ガッシャーブルムっていうのはチョゴリザに登った時の向かい側、ⅠからⅣまであって、Ⅳはヒドゥンピークとも呼ばれますが、そのガッシャーブルムⅢとキンヤン・キッシュの許可申請書を持っていったんです。

平井：そう、交渉の途中でサルトロ・カンリが再浮上してきた。

高村：キンヤン・キッシュは東京大学が行きましたね。向こうに行っていろいろ交渉するんですが、当時まだ国境問題があって中国・インド・パキスタンの国境近くは許可できないということで、外務省アジア課長とか国防省へ交渉に行くんですけれども、どうしてもそれは無理やと言われる。私がおもいあまってラホールで今西錦司さんと懇意で岩坪さんとスワートの方に行ったことがあるイスラミアカレジのA・H・ベグ教授、パンジャブ大学のイナムウラ・ハーン氏に会って、どこか可能性のあるところがないだろうかともちかけました。そしたらカラコラムクラブの事務局長ハイヤット・アハマド・カーン氏も乗り出して、日本とパキスタンと合同で申請したら許可を取れるようにがんばるという話になった。そこで私はただちに日パ合同サルトロ・カンリ可能性ありという電報を京都に打ったんです。京都では、えらい変わるなーと首をひねりながらも在日パキスタン大使館に、いまからちょうど五一年前の七月七日にサルトロ・カンリ登山の申請を提出した。それから私は一二月まで滞在しましたが、

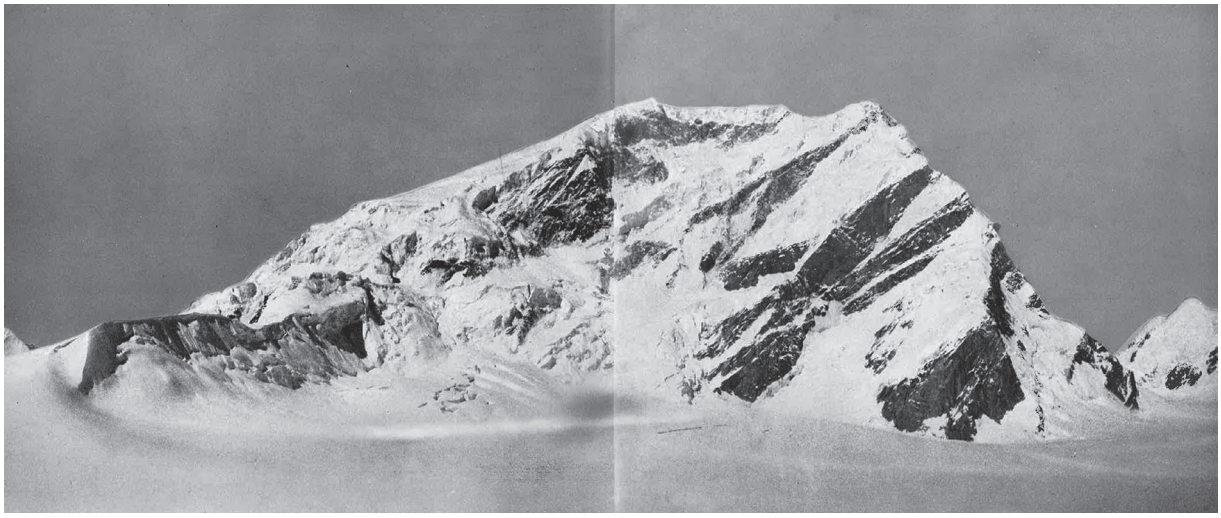

JC474 KAR Q1540 XWC5663 SK27
KYOTO 21 19 1300

LT
KOSHI KARACHI

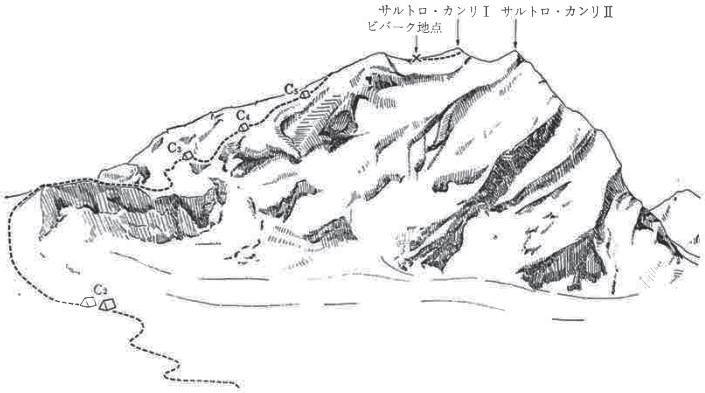
TAKAMURAE OMEDETOO DELPHERNI SAIDAINO KEIIO HYOOSU
FUNDOSHI YURUMENA MINASANNI YOROSHIKU OKAERIO MATSU WAI
POKO OSHIME TANI UEO GORO

COL Q1540

＊1961年11月19日京都よりパキスタン日本大使館気付で高村氏に送信された電報。
「タカムラエ　オメデトウ　デルファニ　サイダイノ　ケイイヲ　ヒョウス　フンドシ　ユルメ（ル）ナ　ミナサンニ　ヨロシク　オカエリヲ　マツ　ワイ、ポコ、オシメ、タニ、ウエオ、ゴロ」
なおサルトロ・カンリ登山の許可は、池田総理とアユブ・カーン大統領の18日昼の会談で明らかにされ、翌日には朝日新聞などで報道された。



サルトロ・カンリの北東面（朝日新聞社刊「サルトロ・カンリ」より転載）



ルート図（朝日新聞社刊「サルトロ・カンリ」より転載）

一一月に池田勇人首相が戦後はじめて東南アジア諸国歴訪の途次、訪パする予定がある。それまでに腰を落ち着けて現地で好感を得ておけという指示でした。幸い懇意になった書記官のかたがたの計らいでパキスタン大使館でアルバイトすることになり、農水関係の人が池田訪パの意義について記事を書かれる手伝いをやり、日本の文化紹介に生け花をホテルに陳列するため運ぶのを手伝いました。池田訪パの当日には多数の随行記者諸氏をアテンドしてマイクロバスに添乗しました。ホテルでは記者さんにウィスキーと新聞を差し入れるのも仕事です。ある日、池田首相とアユブ・カーン大統領の公式会談が終わり、車で退出される古内大使を見送っていたら、突然車の窓を開けて、「池田総理からサルトロのことを話題にしてもらい、ＯＫの返事をもらったよ」。いちどは池田首相にちょっと会わせていただけませんかと宿舎を訪ねたがなにぶん若僧、しかも半年も着ている夏服は陽に焼けています。担当の秘書官はじろっと私を見て「首相にはよろしく伝えておきます」といって門前払いになった。ところでここにいたるまでに京都では池田首相にどういうアプローチを取ったか私自身は聞き逃しています。どうだったんですか？

岩坪：古内大使はいうのがなかなかの政治家で、京都大学の山岳会というのは、日本でもパキスタンでも有名やというので、うまいこと京都大学出身の池田勇人がアユブ・カーン大統領と会う、その友好の印にジョイントというふうにすーっといったんで、古内さんがやり手で、こうやったらどうやと考えてくれはったんじゃなかったかと。

司会：古内さんはインドネシア大使になったときに、加藤泰安さんのときのスカルノ峰のときもやってくれたんですよね。

平井：国内工作としては桑原先生が京大教授というので―加藤泰安を通したかどうかは知らないけれども―池田勇人首相にこういうことがあるからと言ったら、池田勇人首相がアユブ・カーンと政治の話ばかりでは気詰まりだから、そういう話があってよかったと喜んでくれた。ベグ教授の方からジョイントならサルトロ・カンリをやろうじゃないかと言っ

て、その方向へ一気に走った。

岩坪：それから後に胡耀邦が京都に来たときに日中友好でナムナニに行きましょうと知事が言うわけ、それで胡耀邦が重大な関心を持ちますと言って。この手はサルトロで終わったのではなくて、またナムナニで活かされた。

高村：僕は大使館で皆さんの手伝いや、新聞配りをやりながらその夜もホテルの部屋でウィスキーを飲んでいた。そしたらそこに古内大使が見回りに来られて、ねぎらいの言葉とともに昼間の会見の結末をもう一度確認して下さった。本当にうれしくてひとり乾杯しました。

平井：当時イギリスのImperial CollegeのK・J・ミラーという人がサルトロの許可を取るために一生懸命やっていた。僕は彼とコンタクトを取っていて―のちに会ったんだけども―彼らも許可が来なくてイライラしていて、なかなか来ないな、これでは今年も終わりやな、という話をしていた最中だったんです。国際的にも競争が激しい間隙を縫って池田訪パを機会にサルトロのことを託す、京大ならではの奥の手やという感じがする。

高村：先ほど申しましたが（池田首相は）はじめての東南アジア歴訪だったんですよね。パキスタンの新聞でもJapan. Proud of Asiaとか日本に好意的な記事を載せていた。大使館では現地新聞用に、戦後日本の農業生産の進展に関する農水省から来た人が一生懸命記事を書かれ、すこしは協力しましたね。まだその時は日本航空がヨーロッパまで入っていない時期だったし、日航のお偉方がその工作にパキスタンに来ていました。

司会：あの方にはナイロビでも会いましたよ、七〇年代に。（これは人違いらしい）

高村：そういう時期であったのと、池田さんが所得倍増計画といっていた時代で、日本とインドネシアの平和条約が一九五八年ですし、対合衆国はじめ外交上いろいろ模索していい関係を作ろうとしていたところだった。

司会：うまく使ったというか、桑原さんとか今西さんとかそういうところの判断なんですかね。それで合同隊というのが条件だったんですね。

高村：その結果、下地は四手井先生がおられる間にラホールでジョイントの条件とか、装備とかの素案は作って、八月中にめどはつけていました。で、一二月に仮許可を抱いて帰ってきたんです。

司会：そういうこともあって、パキスタン側からも登頂隊員を入れろということは現地でそういう要望が出てきたんですか？最初から？

岩坪：それは合同なんですから無理やりにでも一人はあげないと格好がつかないと。幸いバシールがなかなか優秀な男で……。

司会：彼は山は登ったことはなかったんですね。

岩坪：高村さんとYさんが一生懸命ひっぱりあげたんですね。

平井：下でね、僕らが登山訓練はさせたんですよ。滑落停止練習とか全部させて、そういううえで上に行かせた。

岩坪：バシールはずっと隊と一緒だったんです。もう一人のペルベッツはあとからきて、C2かなんかで我々と合流したんですわ。だからそれまでトレーニングしようにもそういう機会はなかった。

司会：バシールを登頂隊員にというのは現地で決めたんですか。

岩坪：許可が出たときからの大前提ですよ、なんとか一人ひっぱり上げなあかんというのは。

高村：さっきも言いましたが四手井さんがおられる間に、八月にメンバー構成とか装備、ロジスティックスなどについて討議したんです。リーダーをどっちにするかという議論になりまして、ハイヤット（・アーマッド・カーン）は、やっぱりパキスタン側がリーダーにならなくてはと。ところがベグさんは今西さんやらゴローさんも知っている穏やかな経験者ですから、四手井さんにやってもらおうと。登頂隊をどうするかまで話はいきませんでした。バシールの場合は現地で最終的に、これはいける……と。

岩坪：今から考えたら、もしバシールが登っていなかったら難儀ですよ。あと我々がアユブ・カーンのところに行って報告をしたときに、よくやってくれたと言ってもらったけど、もしバシールが登っていなかったら報告に行けなかったね。

高村：ラッキーでしたね。背が高くて柔軟性があって、アイゼンワークも悪くなかった。

平井：隊長問題やけどね、パキスタン側隊長と日本側隊長と隊長が二人いて、全部分けてますんや。

前小屋：パキスタンでは新聞に広告を出して勇気のある若者を募集しておりました。ハイヤット・アーマッド・カーン―カラコラムクラブの会長―から若い隊員が揃ったら、パキスタン領カシミールのどこか雪山で、登山の基本技術を教えて欲しいと頼まれておりました。しかし応募してきたのはバシール、ペルベッツの二人のみだったのでそういう訓練は事前に行わなかった。パキスタンでは当時はちゃんとした登山の技術を持った若者は稀でした。

高村：ベグさんはかなり山の経験は豊富で、六一年の夏にはイギリス隊のヒスパー氷河近くのスノーレイク―僕が今度は現役の連中とこんなところで合宿をやりたいなと思ったところ―の学術調査隊にリエゾンオフィサーとして参加していて、私たちはその帰りを待ったのです。

岩坪：ベグさんはヒンズークシ最高峰のティリチミールの隊にいたでしょう。

高村：彼は英国隊などを見てるから決して無理はしません。性格的にも。ところがハイアットさんはやっぱり名声を高めたいというのもあったでしょう。応募して採用されたバシールはビバークの夜、あの緑の庭のある家へ帰りたくなった、と言い出した時もありましたが、応募者もなにかと大変だったとおもいますね。

司会：そういうときはYさんがおだてたんですか。

斎藤：いや、最初から意欲的でしたよ。最終的にバシールを行かそうっていったのは林さんだよね。加藤泰安は軍人上がりだから、弱いやつはおいていけというか。

第二登は可能だった？

司会：それでバシールを連れて登って、余力はあったのに第二登、第三登はしなかったという判断は？

岩坪：加藤さんの判断。指揮官としたら初登頂してくれたら、あとはさっさと帰った方がいいわけですわ。若い頑張り屋のクライマーたちは俺たちも登りたい、登りたいと言うわけ。指揮官と兵隊との考え方の違いがあるということでね、若い方の気持ちが正しいと言ってしまうのは問題やと私は思う。実際、一九八八年日本・中国・ネパール合同のチョモランマ登山隊の今西壽雄さんのときも登頂するや否や退却！と一斉に各国の有能な登山家たちが退却させられるわけです。戦争いうのはそんなもんやでという気がする。

斎藤：ナムナニのときも、登頂したらすぐ、物事は適当なところでやめろという格言をひいた電報が北京の李夢華スポーツ相から来た。

高村：加藤さんのご先祖の家訓が、中入り後の切れの戒めで、ある程度戦争が決着ついたら、深追いしないで切り上げるのが大切やと。

上田：初登頂で深いラッセルがついてるから、あとは日帰りでいけるのにね。

斎藤：天気もよかったしね。僕は楽勝やったと思うけど。

平井：ただあの頃は気象衛星も何もなくて観天望気でしか天気予報ができないわけですよ。そうするといつ天気が崩れるかわからない。天気が崩れたらあかん、事故があったら元も子もないということで下りて来いと。

高村：斎藤さんと降りてきたら、岩坪・林チームがかなり上までサポートに来ていて、テルモスが置いてあった。それで、しかしかれらは次のために持ってきてるんだなあと、僕らはそれに手を付けないで降りたんです。

上尾：登山の哲学というか、あの頃はまだ昔式の大学あげてとか日本山岳会あげてとかいうものでしたからね。外国ではすでに個人主義的なものが中心になってきていたけれども……

岩坪：我々はお家大事の立場やから、日・パの三人が登ったら、それでもういいわけです。

上尾：会が次々遠征隊を派遣していくためには次の隊のメンバー要員を作っていく必要があるわけですよ。私は、サルトロの二年後に現役とガネッシュに行きましたけれども、とにかく現役全員が第一登してもらいたかったので、普通なら初登頂パーティーは二人が効率的で、三人パーティなんか出すのは普通ではないのですが、敢えて三人パーティーを出しました。カンペンチンのときも中国ではすでに大勢でワーッと登るのが当たり前になっていて、二人だけで登るなんてという雰囲気があるように思われたので、次の登山許可を取るため中国側にＡＡＣＫの実力を示すには少しでも恰好のいいやり方をせんといかん、ということを考えていて、多人数の初登頂を試みました。かなり無理をしましたが、幸いにしてうまいことといきました。

平井：一九七六年に僕がシェルピ・カンリの隊長で行った時、登頂隊員は二人だけ、あとは隊長命令として終わりと言うたけど、隊長としては全員無事でしかも成功という相反するふたつをいかに達成攻略するか頭の隅から離れないんですよ。しかもものすごく危険な山やったから、僕の場合は二人登ったらそれで終わりと。だから加藤泰安さんも、その考えが少しはあるんとちゃいますか。いつ何時天気が崩れるかもわからんし。

岩坪：少しどころじゃなくてそれだけだったと思いますね。

平井：あとになって考えたら天気が続いたから二登も三登もできたと思うけど。

装備のこと

上尾：装備係りの下っ端をしてたんですけどね、あのころＡＡＣＫではなんでも装備は自前でデザインして作るプライドがあって、一生懸命自分らで考えてやっていたわけですよ。当時はフランスなんかでは猛烈良い装備があって、日本でも一部の遠征隊ではヨーロッパから輸入して装備を揃えたりしていたけど、ガネッシュのとき我々のような装備だとサーダーが嫌な顔をするわけ、それを見てこれはいかんと思った。当時一ドル三六〇円の時代ですけれど、ある意味では勉強不足やったんかな。

平井：やっぱ金やで。

岩坪：チョゴリザの反省会の時に桑原、梅棹さんがお前らが作った装備や服装はイタリア隊に比べるとダサいと言った。お金全然ないのに、布もらってきてズボンやらシャツやら京都の授産所に行って作ってもらったんです。ダサイの当たり前ですねん。

上尾：武庫川女子大の安田武さんもおられたしね。安田さんが頭の固い人で。

平井：ヤッケでも、膝を崩した時に楽に組めるようにダブダブなんよ。

岩坪：厳冬のアンナプルナ隊で苦労したから、羽毛服の上から着れるようにオーバーズボンもヤッケも作っているわけですね。ノシャックの時、ヒンズークシュの夏は暑いからと、私は一澤さんに言って、オーバーズボンは半分の幅にした。

斎藤：安田さんは防風、防寒、登攀を考え実用的なデザインをされたのです。

高村：安田さんは武庫川女子大で繊維の質と機能の研究をしておられた。左右違う布でパッチを作って冬にこれをはいて自転車で走り、どちらが暖かいか意見を聞かせてくれとかね、特に機能を重視されていた。チョゴリザの時に試作したテトロンのタフタはあとで、国鉄の道路工事する人のヤッケに採用された。一九六二年僕らがサルトロから帰ってきたころに、堀江青年がひとりで太平洋横断に成功したときのヨット、マーメイド号の帆にもなったときいています。

上尾：プロパンガスのランタン用にも、中の見えるプラスチックの小型ボンベがありましてね。

高村：たしか土倉九三さんの発案でヤマハの下請け会社のところで作ってもらった。現地に持っていって高圧ガスを注入して、チョゴリザではひとつの火口の下に三つ手榴弾ほどのボンベをつけて使った。

岩坪：私らがノシャックでポーランド隊にキャンピングガスをもらったのが日本人としては最初だと思います。

斎藤：Ｃ５とアタック隊がキャンピングガスを使った。ビバークの時、これでお湯をわかしました。

登山活動とフィールド活動

高村：上尾さんが如何に弟子を養成するかが大切だとおっしゃった。僕の場合は学術調査と登山活動、両方はようしませんでした。登頂第一主義みたいな感じで、道草を食ったらいかんと。今西さんや吉良さんたちのポナペ島調査など、ある種の徒弟的なところで後継者が自発的に育っていったという面があります。僕らの時には山登りの技術、考え方に関して伝承はあったかもしれないけれど、学術調査についてはとくになかった。ただ医学調査の方は経験や知見を残したし、岩坪さんはスワート・ヒンズークシの調査で論文を書いてはる。しかし僕の場合は中尾佐助先生みたいな偉い先輩の真似はできなくても、もうすこしフィールドワークができなかったか、残念ですが余り余裕はなかった。むしろ前の年に一人で偵察に入った時の方が、村で家の中で泊めてもらったこともあり、堆肥を念入りに人糞尿も混ぜて準備することなど少しは聴き取り調査もできました。なお京都では長い間研究室を留守にしていることを中尾さんは心配されて、時間があれば研究現場めぐり

＊頂上アタックの前日、C5 より東方、K12 を望む

から村へひかれる水の温度がどのように変化し、貯水槽で管理されているか調べ、またＡＢＣでは輸送用のワイヤバンドボックス利用して、バーミキュライトと液肥で宮重大根を育てるテストでした。水やり、朝晩のふたの開閉などの管理は四手井先生にお願いしましたが、登頂を終えてかえってきたころ、小さなカイワレナが収穫できたことは、報告書の写真にもある通りです。なおＡＢＣ滞在中に四手井先生が採集された通称ユキムシには、二種の新種がふくまれていることが、吉井良三先生によって確認されたはず。私たちがキャラバンの途中で採集した植物の腊葉標本は理学部の植物分類学研究室に進呈しましたが、特に目を引くものはなかったようです。

司会：サルトロは登って、すっと引きあげてきた。ガネッシュは登った後、若い人たちがづーっと回って帰ってきた。

酒井：インドラサン隊ではそんなに費用はなかったから、ちょこちょこと。

上尾：同時期に二つの隊が京都大学から出てるわけでしょう。それでサルトロが終わった時に現地で誰かがインドラの方に回らんかという話があったのです。一部の装備を持っていけと、行くなら上尾だということで決まっていたんですけれども、僕の理解では来るに及ばずと連絡がきた。それで私はチャンスを逃したんです。

酒井：そんなふうな話がはじめの頃にあったことは覚えてはいるんですけどね。

高村：学生だけでやる隊にはすごいことができる可能性を秘めていますね。年寄りを頂点にして年功序列的なグループでは、若い方はえてして使われておけばよいとか無責任にからだだけ動すということになりかねなかった。若い世代を中心にした隊で互いに自己管理してうまく運営できないかと思っていたら、インドラサン、ガネッシュでそれが実現しましたね。若い後輩諸君は—山に関してだけやないけど—やっぱり自分たちでやればかなりできるとおもいますね。

酒井：上田さんなんかもそうでしょうけど、当時山岳部員っていうのは一学年二〇人とかいて、民主的な投票によってあの男が行くのが賛成だとかそんな形で隊員が決まったと私は聞いている。だからそれなりの抱負をもって現役は参加しているのですから、あまり変な先輩は入らんほうがよかった。

上尾：当時は装備が結構だいぶ残っているからそれを運べというのだったんですけどね。

上田：全く先輩が入らないと経験がつながらないわけで、一九六四年のガネッシュの時に、隊の組織作りで一九六二年のインドラサンの酒井さんが尽力されて、サルトロ隊のほうからは上尾さんがきてくれて、ヒマラヤは初めての現役部員だけであれだけ雪崩が起こるところで判断しようがない。そういう伝統がうまくつながった時代だと思います。

上尾：そう言ってもらえると行った甲斐があるのですが、当時の現役は大変優秀ですよ。でもさせたら、といってくださったそうです。しかし私にできたことは、ラホールでサトウキビの研究所を見学したり、仮許可書もって帰る途中、東南アジア学術調査隊が活躍中のタイに立ち寄り、まだ珍しかった浮イネの標本を研究室へ土産に持ち帰ったことくらいです。作物屋として試みたのは、扇状地

七〇〇〇mの山に当時の日本の冬山の装備で登っているんですから。最近AACKのホームページに写真をアップしましたけど、オーバーハングした氷壁に取り付けた縄梯子は、実はベースキャンプのコックに縄梯子用に薪を取って上げてくれとトランシーバで言いましたら、シェルパが下へ降りて薪を切って、縄梯子の横の棒を作って現場で組み上げたのですよ。あれがなかったら登れなかった。はじめにオーバーハングした氷壁を最初に登るのだって腰縄だけでハーネスなんてないですよ。たぶん唯一の武器はサルトロの時の残りのスノーバーと鐙があったのかな。

上田：アイスハーケンがありましたね。上に出てスノーバーを打ち込んで、それに縄梯子をぶら下げて。

上尾：それでオーバーハングの氷壁を二人で登った。僕が判断ミスをして、当然三人で、二人がひっぱって、一人が登るべきだったのに、二人に任せますわと言って降りてしまった。二人にはそれはもうずいぶん高度な氷壁登攀の能力があったと思いますね。

花見団子の串刺し

岩坪：あの頃、サルトロやチョゴリザの隊員構成は祇園は花見団子の串刺しと私はひやかしてましたけど、年寄りから若手までみんなヒマラヤに行きたかったんですわ。四手井さんなんか、今西さんはマナスルに、桑原さんは隊長でチョゴリザに行ってますでしょ、俺も行きたい！って。四手井さんが隊長をするとして、登攀作戦を指揮する者がいる。加藤泰安さんはチョゴリザに副隊長で行っているから、次は隊長で行けるに違いないと待っているわけですよ。それを今西さんにお前悪いけど四手井をサポートして副隊長で行ってほしいと言われ、二度の勤めと左褄という句を作ったわけです。その次、林一彦さんも、藤平さんがアンナプルナ、チョゴリザに行ってるので次は俺だと思ていたわけ。その次は中島ダンナがチョゴリザに行っとるでしょ、斎藤Yさんをほっとくわけにはいかんと。ずぅっとこのようになってしまうのです。

平井：四手井さんが隊長っていうのはだいぶ前から決まってましたで。

司会：私がこの本（ヒマラヤの道）を書いた時には一九六〇年はAACK創立三〇周年になるので、そのイベントとして、やっぱり創立メンバーとして四手井さんを隊長として。とにかく、今西さんなんかは忙しいし、ということではじめから四手井さんは決まっていたと思っていた。

平井：そうや。四手井さんはそのときフライング（まだ許可が来てないときから活動を開始したこと）して近藤さんと一緒に金まで集めはった。許可が来ないと分かった時点でその金、装備をどうするかでものすごいわしらは苦労したで。

高村：四手井先生というのはわりあい何かにつけてさっぱりしてはりましたね。

岩坪：あの頃はみんながヒマラヤに行きたかった。

司会：そういう時代というか。海外渡航自由化が一九六四年ですからね。

高村：今、教授クラスはみんなヒマラヤに行った人ばかりやね。松林先生もまだまだ先がありますよね。今みたいな話を聞いてどうですか？だいぶ状況が違いますね。

垂直派と水平派

松林：かつてAACKでいわゆる「南北朝」論議、垂直登攀をするのがいいというグループともう少し広がりを持った学術調査をするのがいいという二派論争がありましたね。それは形を変えて今もあるんじゃないかと。私はどちらかというと学術派なんですけど、今の現役は垂直登攀派ですね。今の京大の教授陣は若いときには垂直派です。垂直を達成したあとはひろがりのある学術調査を、という感じではないかと思います。

岩坪：垂直派はそれで金を集めるということがなかなかできないので、水平派は自分らが行くために役にも立たん垂直派など切るわけですよね。今西さんはそれで四手井さんやらを切ったわけです。それで南北朝の争いになったわけで、そんな思想に関わるような対立じゃないと私は思いますけど。

平井：昔は垂直といってもモチベーションがすごくあったわけです、未踏峰が多かったから。今は垂直に対するモチベーションはかなり変わってしまった。

高村：よっぽどきわどいところをやらないといけない。

平井：しかも未踏峰がものすごく少なくなったし、魅力のある未踏峰が少ないし。だからそれで垂直派と水平派がそんなに分かれると

＊頂上に立つ斎藤（左）とバシール隊員

いうのもおかしいような気もしますけどね。

松林：その接点が一九九〇年にシシャパンマ医学学術隊にあったと思います。シシャパンマ医学学術隊を作る時に、ＡＡＣＫの隊にするか否かという時、垂直派の平井ポコさんからさえ応援をいただきましたけれど、ＡＡＣＫは今まで未踏峰しか登っていない、シシャパンマは八〇〇〇ｍだけど既踏峰である。これがＡＡＣＫの目標には相応しくないという意見がかなりありました。その後、梅里雪山を通じて、岳人の初登頂の価値観と、環境保全ならびに現地住民の気持を大切にする登山との相克が議論された。今や、登山では後者の価値観を大切にしなければいけない時代に入ったと思います。しかし人類が未だ成し遂げていない領域への挑戦という意味での「未踏峰」の価値観は普遍と思います。問われているのは「何が未踏峰」かという点にあると思います。地理的なものか、あるいは価値的なものか？

高村：僕らが現役時代、一九五〇年代の五〇年前というのは、どんなだっただろうと考えてみたんです。チョゴリザ周辺にはすでにイタリアのアブルッジ遠征隊が入っていました。サルトロ周辺もコンウェイやワークマン夫妻などが戦前にだいたい歩いているわけです。バルトロ氷河なども今西さんが初めて歩かれて注目されたのですが、世界的にいうと、このあたりの地理学的探検の時代は終わっていた。藤田和夫さんたちの地質学など大きな成果は残っているけれども。山のほうも、僕たちが山岳部に入ったまさにその年に、エベレストが登られたし、初期の探検的登山野時代からはすでに半世紀が経っていたわけです。でも僕らには当時のカラコラム、ヒマラヤは大きかったから、自然にパイオニア的な気持ちで入って行きました。しかし今の世代はその我々の半世紀後の人たちです。さらにいっぱい登られ、また広く歩かれているわけです。何をやるのが一番面白いか、どういうところに興味を持って活動すればいいのだろうかと他人事ながら大変やと思います。

松林：今回現役が行くような六〇〇〇ｍであっても未踏峰であれば我々はよく理解できます。しかし登山界を見ていますと、未だに無酸素エベレスト登山というのがありますね。第一回のメスナーとハーベラーによる無酸素エベレスト登山は人類の挑戦として価値があると思うのですが、無酸素でのエベレスト登山の死亡率が五〇％を越える今、それもあえて行くという個人の冒険といいますか、これにどのような意味があるか、私には疑問です。あるいは三浦さんの八〇歳のエベレスト、年齢への挑戦―あるいは個人の限界に賭けるという冒険が今の登山界にはかなりありますが、私自身は十分に理解できません。

岩坪：今の山岳部の人は偉いなあと思います。我々の時にはつらいけれども成功した時には栄光が得られたわけですが、今はそういうものがほとんどあらへん状況で、山登りを続けておられる。名誉や栄光を作るのはリーダーの責任ではないかと思うのです。教授たちがそういう場を何とか作ってそれを若い人たちに提示するというのがリーダーの仕事で、それはどうやったらできるだろうというのが今日の課題なのでしょう。福島の原発事故で、消防の注水隊が突撃する時に、東京都の知事があとの面倒は俺が見ると言うと注水隊長の奥さんが、みなさんのためにあなた頑張ってくださいと……。隊長はそれに応えて行ってまいりますと突撃するわけです。なにかそういうのを探さないといかん、なんかないかなと思います。

高村：一九六六年にアフリカのカラハリ砂漠に単身でブッシュマン集団に会うため山岳部ＯＢの田中二郎さんは、当時院生ながら探検

を地でいった人です。しかし先年刊行された探検部五〇年史に瀬戸口さんも書いているように、最近では院生がフィールドワークをやる場合、ある科学研究プロジェクトのメンバーとしてシステムの中で冒険をやれるようになった、冒険がフィールドワークの中に内在化されていると。だから昔ほど栄誉とかそういうのではなくて、探検的行為そのものが当たり前になっている。シシャパンマ、八〇〇〇メートルの医学研究遠征も、組織として人材、研究力の蓄積ができてきたら、なんでもなしに高所でいろいろな研究をやりはる。かつては冒険的なところがあったけれども、今はそうは言わないで日常化しているという面もあると思うのです。だから本質的に個人ひとりひとりはやはり未知の世界に向かっている、精神的にはものすごくプレッシャーを押しのけながら頑張っているけれども、全体としてはそれを包んでしまっている。だからといって旧世代の我々が、今の人たちはかわいそうだ気の毒だと言うほどではないかもしれない。パイオニア的な目的に向かっての指導者のむつかしさ、フォローワーのむつかしさもそれなりに在るだろうと思います。

＊頂上に立つバシールと高村（右）隊員

司会：五〇年前のその時点に戻ると、AACKができて三〇年、戦前に今西さんたちがAACKを作ってやろうとして果たせなかった。戦後になって山岳部という新しく若い人たちが入ってきて、アンナプルナは失敗したけれど、チョゴリザでやっと実って、ノシャック、サルトロと、ほんまのピークですよね。その時点で老・壮・若い人と、見事に層の厚さと歴史がうまく実った、AACKとして栄光の時期だったと今となれば思うんです。そのあともいくつか続くんですが、AACKとしてはヤルン・カンまでずっと時間があいてしまう。

上尾：それは努力の不足と言うよりもネパールの事情なんですけどね。中国とインドの関係が悪化して、インドがネパールに対し中国の国境付近の山には許可を出すなと言っていた。AACKとしては如何ともしがたかった。今でも思い出すのですが、一九六四年にガネッシュが終わってから、ひとりでネパールからニューデリーに行った時です。そこで舟橋（明賢）さんに会った。舟橋さんはヤルン・カンのためにインド政府と交渉して許可を取ってこい、高村さんが成功したからお前も行ってこいと言われて、巨大都市ニューデリーにポンと追いやられはったみたいな気がするのですけど、あんなところにいってどうしたらいいかわからず悶々としておられるのだろうなと思いました。

岩坪：私も舟橋さんを気の毒に思っていました。

高村：いろんな役所がいっぱいあるから。

上尾：パキスタンとインドでは国のスケールが違いますからね。ひどい目にあわれたとそのとき思いました。それに実際何年も許可が出なかったし。

司会：最終的には許可がくるんですよね。

上尾：それは努力の結果もありますけど、どちらかというと政治情勢が変わったということで。

平井：許可取得のために田附ガイガーが行ったり、西堀さんが行ったりして……。登山料も先払いしているし、特別の手は使っていないけど、普段の持続的な努力はしている。ドイツも狙っていたんですよ。

高村：ちょっと時代戻って、西堀さんがマナスルの許可を取りに行った時のやり取りの手紙が、酒井さんが今整理している西堀書簡のなかにたくさんありました。（＊次項の「AACKアーカイブ委員会報告」参照）

酒井：今西さんと西堀さんがちょうど五〇歳

ぐらいで、今西さんは京大講師、西堀さんは東海大学教授だったころですね。木原均先生がインドの会議に行くのにＵＰＩ特派員という形で無理やり西堀さんを派遣して、資金は綱渡りで、散々な苦労をしてネルーさんに会ったし、インドのしかるべき大臣にも会って、最初は日印合同のネパール・ヒマラヤ学術探検の可能性を探るという形でインドと合同でやろうとしたが時期尚早でダメ。ネパールに行って交渉するという奥の手を使って日本人として戦後初めてカトマンズに入った。国王とか皇太子とかクリュシュナ（ヴァルマ）とかと人脈をこしらえて、マナスルに関するよい感触を得たので、登山許可申請書を提出して帰ってこられた。そのあとで、もし許可書が来たらＡＡＣＫだけの実力ではあかんというので、結局は日本山岳会（ＪＡＣ）に移管されて……。四手井さんやらの反対意見もあったんと違いますか。

司会：結局あの時点でＡＡＣＫというのはまだ再建されていない時代、現役の山岳部が強いというのはわかっていたけれど、今西さんらはまだいまひとつ信頼していなくて、自分がネパールに確実に行くには、日本山岳会に譲って、偵察隊長で行った方がいいという判断をして、それに対して四手井さんが怒るわけです。

岩坪：僕が思うには、今西さんは自分がしたいことをしたい。一生それを通してきた人やと言うたらようわかりますね。

平井：山岳部が本格的にまとまって活動したときは一九五〇年だから、まだまだ実力が知られてないのは当たり前です。

酒井：西堀書簡の第一信っていうのはFauna and Flora（ＦＦ：生物誌研究会）の今西錦司宛なんです。一九五一年の年末に西堀さんがインドに行かはった時にはＦＦでやると、ところがだいぶ許可が来そうだという情勢判断でＦＦからＡＡＣＫに移したと、私はそう見ている。

司会：あのときはまだ、戦前に作ったＡＡＣＫが戦争で休業中だった、そのためにＦＦでと、これは教官の組織ですけど、派遣するための団体を作って、そこからマナスルもやろうという当初はそういう計画なんですよね。

斎藤：日本山岳会に譲ったというのは、良い判断だったと思う。

司会：そういう判断はさすがやと思うんですけれど、四手井さんと若手は怒るわけです。

岩坪：だって自分はちゃんと行きよるんやもん。

平井：あれはＪＡＣに移管せんでもＡＡＣＫだけで行けたと思う。

司会：あのときすでにスポンサーも毎日新聞が後援につくと言ってたから、それで行けたんですよ。登る実力が……ということだったんです。

高村：一九五三年だったらＡＡＣＫの連中はみんなアンナプルナに行ってましたよ。

平井：違うやん。マナスルがそんなことになったから、皆憤懣やるかたなくアンナプルナに行ったんやんか。その部隊をそのままマナスルに移していたら話は違っていたと。

酒井：ＪＡＣに今西さんが話を持っていたとき、まだ許可書は来ていなかった。東京のＪＡＣに譲渡してしばらくしてから来たんです。一九五二年の五月ごろです。

平井：ＦＦ宛に来たから、京大文書課がわからんかったんや。

酒井：その秋に、今西さんが先遣隊長で行ったんです。

岩坪：今西さんは自分が先遣隊長で行くという場はちゃんと作っていたというので、四手井さんが怒るのもわかりますわな。ずるいわ。

平井：そうやな。

司会：そういうこともあって、サルトロの隊長は四手井さんということになっていくわけですか。

酒井：一九五〇年か五一年頃にＡＡＣＫ再建ということになって、ものすごい力を発揮した。今西壽雄さん隊長のアンナプルナを出した頃は、今西（錦司）さんより四手井さんの方が正面切っていろいろな形をやっておられたらしい。間接的な証拠ですけど。

平井：それは「ヒマラヤへの道」に書いてある。

司会：今西さんと四手井さんが対立する形になったけど、それがサルトロでうまく落としどころになったと思うんです。

岩坪：今西さんは四手井さんが隊長でサルトロに行くことを承知して、嫌がる加藤泰安さんに副隊長で行けと因果を含めている。このままでは四手井の隊はどうにもならんことになるからと言って。

酒井：それは歴史として面白いな。

上尾：サルトロ・カンリ遠征のインド・パキ

スタン関係における歴史的な意味づけを考えてみると、パキスタン政府がサルトロ隊にシアチェン領域に入ることを許してから、あと続いてシアチェン氷河周辺の山にどんどん登山許可を出して多くの隊が入っていった。サルトロの頃はインドも気にしなかったけど、次々と外国の登山隊が入るようになってから、インド軍がこの地域はインド領であるはずだと言って、シアチェン氷河を占領しパキスタンとの間にsecret war、知らぜらる戦争が始まって、多くの命が失われ、今でもまだ続いている。

高村：隊長付連絡将校バシールに帰途すこし寄り道したいと相談したが、一歩たりとも申請ルートを外れては困ると言っていたね。あれは早く帰りたいというのだけではなくて、とても慎重だったことになりますね。

新しい世代への提言

根岸：お話をお聞きしていて、行くこと自体が大変な時代だったんだなと感じました。今は冒険が個人化しているとか、栄誉がないんじゃないかと言われる中で、新しい切り口を模索しながら登っているんですが、ただ未踏峰を登ればいいという時代じゃないと思う。当時はどのような気持ちで登っていたのかというのをお聞かせいただきたい。

平井：シアチェン氷河というのは戦前イタリアのダイネリ隊が入っただけで戦後もたしか一隊しか入っていない。戦後から一七年も経っていて、地球上にないような景色がある、ほとんど誰も入ったことのない未知の世界がある、野性味あふれる世界に行ってみたい。そこにそびえるサルトロ・カンリに登りたいという、そういう内から湧いてくる未知に対する気持ちで行った。チョゴリザでも同じ。あとで隊長として三回行ったけれども、それも、ここは誰も踏んだことのないところだという、そういう思いが強かったから。

高村：私は一九五三年に大学の山岳部に入ったんですが、その五月にエベレストが登られました。身の程知らずやけど正直がっくりしました。市電の中でエベレスト登頂を新聞ニュースを見て、翌朝山岳部のルームへ弔いの会があるだろうと出かけたが、誰もいなくてガランとしている。上級生やOBは冷めてるなとスゴスゴ下宿へ帰ったのを覚えています。本気で八〇〇〇mに登りたいという気持ちは強かったと思う。念願がかなってまずバルトロ氷河のうえを初めて歩き、アイスフォールや雪の斜面を登っていたら実に楽しい。自分でルートを作ってそれが初登頂だったらこれほど嬉しいことはない。チョゴリザで、ルートを考えながらセラクスの間を登ったり雪の斜面をラッセルしているときは、本当に楽しかった。初登頂だから楽しいというのも半分くらいはあるかもしれない。しかし高所でK2はじめ八〇〇〇メートルの山やまを見ながら生活する幸せ感がありました。私はあまり先鋭的登山家ではなかったのでしょうね。

斎藤：私の場合は、未知に対するあこがれというのと、それを実際に踏みしめているという喜び、それだけだったですね。

上尾：お国のためとか大学の名誉のためとか、そんなのはまったく思いませんな。しかし成功すればあくまでも京都大学学士山岳会とか、京都大学山岳部というのが新聞では前に出るんだけど、本人にしたら山を楽しんでいるというだけ。

高村：平井さんがチョゴリザの稜線を上って行くとき、僕らは中島ダンナたちと前進キャンプで見ていました。平井ポコさんたちはいいところ登ってるな、今どんな気持ちやろなと思って、ものすごくうらやましかった。あわよくば私も人の行っていないところに登りたいと。ところがサルトロの時は頂上に着いたら少々失望しました。なんや、もう一登るとこはないのか―傲慢な言い方ですけどね。そのときは張りつめているけれども、着いてみればなんやこれだけかと。それでまたどこか行きたくなるのが山かも知れません。

岩坪：ノシャックでポーランド隊がきて、酒戸隊長にお前ら行くか？と言われ、行きますと言った時は特攻隊の気分だった。あとは惰性でずっといったら頂上に着いたんで、やれこれで帰れると思って帰ってきた。現役の時にルームの中で山登りとは何かという議論がいっぱいあって、先輩である高村さんが惰性で山登りをしてはいけないと書かれ、偉い人やな、私はずっと惰性で登っているなと思っているうちに、七八歳になってしまった。

平井：二六歳の時にチョゴリザの初登頂をして、それも含めてヒマラヤに五回行っていますが、全部誰も行っていない山。だからどれも許可を取るのがたいへんだったけど、許可

を取って未知の山に登って初登頂できた時の喜びというのは何ものにも代えがたい。隊長の時は自分が第一線で登ることはしていなければも、チョゴリザの時に藤平さんとザイルを結んでラッセルし、登頂した時の喜びと同じくらいか、それ以上の喜びが隊長としてあった。僕にとってヒマラヤの山登りというのは未踏峰以外は考えられなかった。

斎藤：一九七九年に日本山岳会がはじめてチョモランマに遠征隊を出した時に西堀さんが隊長で、僕は偵察隊長で行けと言われたけれど、本当は行きとうなかった。あんな人が登った山なんか何が面白いんやと思ったけど行けと言われたから行った。そしたらまあすごい山だと思いましたね。一九八〇年も八八年も行ったんですけど、そのあとシシャパンマに松林さんらといって、六〇歳の時に頂上に立たせてもらった。これは未踏峰ではないんですが、自分には未知であったわけで、決して来て損はしなかったなと感じた。頂上から下りるときバテて一〇年は寿命が縮んだと思ったがまだ生きとります。個人個人のパイオニアというのもあるんじゃないかと思う。

上田：動機は未知なところへ行きたいという気持ちですが、ヤルン・カンで頂上アタックに出て登頂できそうになったときは、今登れるぞということをＡＡＣＫの人らにも伝えたいという、ＡＡＣＫのため―と言うとおおげさだけど、気持ちの高揚がありましたね。ポコさんチョゴリザの時はどうでしたか、それもＡＡＣＫとしてのひとつのエポックだったと思うんですが。

平井：僕はね、特に頂上まで必死にラッセルをした時には、何にも考えなかった。自分自身との闘いだから。頂上一点に焦点が絞られていたからね。ＡＡＣＫのために私は今ラッセルしているという感じは、まったくなかった（笑）。僕はあんまり背景（バック）を考えなかった。考えてみたらＡＡＣＫ創立初めての初登頂だから、そういう歴史的意義を考えないといけなかったかもしれないけど。

高村：僕らは後ろからじっと見てましたよ。

平井：とにかくそのときは、今日は頂上のちょっと下で引き返さなくちゃいけないかなという気持ちが半分あったし。

上田：ヤルン・カンは京大初めての八〇〇〇ｍ峰だったし、ほかにもいろいろひきずっていたから。

岩坪：実際に行って、頂上に着いたらあとは帰れるというかんじですな。しんどうてかなわんもん。

高村：不遜かもしれないけど、斎藤先生、サルトロの頂上七七四二メートルで三人でタバコを回し飲みしましたよね。今だったらようできんけど。

上田：頂上に二時間もおられたそうで、うらやましいですね。

斎藤：天気が良かったからね。

高村：午前中に着いて斎藤さんがトランシーバで連絡してました。トランシーバで登頂報告したのは世界最初ではなかったか？

上尾：最終キャンプで聞きましたよ。頂上に登りましたって言うてますぜ。次の隊はどうしましょう、ってすぐに泰安さんに聞いたんですよ。そしたらもう行かへんと言う。

平井：無線があると便利だけど、チョゴリザの時は無線機一台三kgやからね。隊全体で四台しかなくて、上のキャンプには重くて持っていかれない。

酒井：ノシャックの時は岩坪さんと私と二人で行ったんですが、全六人のうち四人前進根拠地のＣ２にいるわけ。Ｃ３もＣ４も、作った時は岩坪と私の二人だけ。Ｃ４に上がった時はＣ３は無人でＣ２に四人いたが、我々二人は全く通信手段を持たないわけ。必死になって登って一二時間後の夕方に頂上に着いたけど、早く帰らないといけない。Ｃ４まで戻れなくて途中で泊まらんといけないだろうと思いながら頂上に着いたんだけど、山が登りやすかったな、というわけ。インドラサンはまったくそうでないけれど。しんどかったけど、最後まで頑張って歩いたら頂上に行けると。田中二郎と大森が第一次アタック隊、富田と宮木が第二次アタック隊。よくやってくれて、私達はまるっきり登頂隊員二人を信頼しきっていたので、あとのメンバーは下で見とってもしょうがない、すぐそばに別の山デオ・ティバがあるから行ってこいということになった。たぶん同日に、二人が険しいところに登っている間に別のところに別の人を送るなんて、隊長としてなんということをしたと言われかねないんですけど、私は登頂隊員二人についてはまるっきり安心していたし、デオ・ティバ登頂の方は数時間以内にやすやすと戻ってこられると確信したので、そういうことをしたわけです。私にとって最初

のノシャックがインドラサンみたいな山でなくてよかったと。一九六〇年は同志社がアビに、慶応大学がヒマール・チュリに登ったでしょう。我々がその年三つ目最後の初登頂になったわけですけど、登れてよかったと。ポーランドみたいなごっつい大男が大勢来たんでね、怖い山やったら本当に悲惨な目も当てられないことになったはずなんですけど、幸い登ることができてよかった。

＊頂上よりチョゴリザを望む

斎藤：ノシャックがね、ビバークしたっていうのが我々がアタックの時に七四〇〇メートルでビバークを決定した、やれるだろうと思った。ビバークを全然ＡＡＣＫでやっていなかったらあの時まだ頂上目指して一生懸命登っていたかもしれない。昼の二時くらいにビバークすることを決めた。まだ暖かい間に四時間ほどぐっすり寝た。今西錦司さんにＡＡＣＫらしい判断だと褒められた。

高村：インドラサンの場合もかなり悪い氷壁があったが、あれがさらにずっと続いていたら大変だったろうと思います。上田さん、ヤルン・カンの氷壁はスケールが段違いに大きいですね。危険なところもいっぱいあって。そういう意味ではチョゴリザもセラックやドーム越えなど危険はあり、サルトロでも雪崩に流されて途中でルート付け替えたけど、ヤルン・カンはスケールが大きくルートに沢山の困難な部分を含んでいたからたいへんなことだったと思います。ＡＡＣＫの遠征の中でヤルン・カンはやっぱりひとつのピークだと思いますね。

上田：ＡＡＣＫを背負っていたというのは、ヤルン・カンの時は一〇年間狙っていたということや、樋口、松田の偵察もあった。翌年に日大が行くことになっていて、さらにドイツも狙っていて先行するラストチャンスだった。

平井：日大は失敗したでしょう。伊藤愿さんが狙っていたというので、西堀さんが頂上にゲンさんの写真を埋めてくれと言われたことがある。

上田：西堀さんは高齢なのにベースキャンプまで登ってこられ、「ＡＡＣＫザイル論」《個々の繊維（メンバー）がよりあわされて強いザイル（優れた伝統）ができる》を述べて遺影を渡され、頂上に埋めてきて欲しいと言われた。これもＡＡＣＫという組織の意識を強めることになりました。

森本：許可がおりなかったり事務仕事がたいへんだったと思うのですが、そのたびにモチベーションがあがっていく、その原動力はなんでしょうか？

平井：山に対する魅力。

岩坪：頭を使わんといかん、向こうの政府やお役人とどう交渉したらいいか考えて、それで池田勇人首相とか……そういうふうに頭を使おうという伝統があったのかもわかりませんね。

平井：ええ山が残されていると全世界の登山家が注目してるわけ。いかに許可をとったろうかと、それぞれがものすごい大きなモチベーションだった。

岩坪：ヒマラヤに行こうと思ったら、会社便覧を買ってきて、出身大学や奥さんの名前、趣味など書いてあるから調べて、お金をもらいに行った。京大はお金を集めるのが上手やと言われるけど、ちゃんとやるべきことはしていたんやと誇りを持っていました。

高村：岩坪さんはそういう政治的判断に喜びを持ってはるし、それでないと突破できないこともいっぱいあったでしょう。一九六一年私がサルトロ許可を取るためにパキスタンに滞在したときには、パキスタンタイムスとかドウンという現地新聞に、各国の隊の許可状況や動向がいっぱい出るんですね。もちろん当時はほとんどが未踏峰。そうするとほかのことはあまり考えない。ある意味では、未踏峰へのあこがれみたいな惰性にはまってしまった楽しみみかな。それらの中から対象を選び遠征登山を実現するには岩坪さんみたいなセンスで探りを入れて実現するための努力が必要だったと思います。一つの未踏峰に眼をつけて、調査し、交渉して実現するまでに実に多くの何段階があり、それを越えるためには当事者の意欲と手立てが必要だということですね。

平井：今世界でどういう山があってどうなっているかというのをいつも勉強しておかんと、急に言ってもモチベーションは出てきません。ウォッチしていてその地域が政治情勢などで行けそうやとなったら全力で許可を取ると。ゴローさんの言う金集めはその次の段階でね。まず許可を取る。許可を取るのにアンテナをとぎすましておく。

斎藤：かつて「岩と雪」という山と渓谷社の雑誌があって、それに京大はよく初登攀をしてるけど、登りやすい山ばかりだと書かれたことがある。未踏の山を探し許可をとるたいへんな苦労をぬきに言っているのだが、わかってないなと僕は思うけどね。

平井：登りやすい山で初登頂が何が悪いか。

高村：今西さんと言うのはそういう意味ではむつかしいところでもなんとか登れと言うタイプではなかったですね。我々の登れるところで、姿の良い山。

松林：登山技術という意味では今の現役の世代の方が進歩していると思いますけど、我々の世代は京大山岳部は登山技術と言う意味では世界一流とはまったく思っていませんでした。もちろん歴史的にはたとえば、上田さんたちのとても強い世代がありましたけど、世界と対比して、京大山岳部が技術のうえで最高という認識はありませんでした。京大の強さは登山技術・体力もさることながら、登山にかける「知力」と思いました。僕は高校は東京でしたので大学の山岳部に入った先輩たちは明治大学とか慶応とか東京の名門山岳部に入っているんですね。東京の名門山岳部は徹底的に技術と体力を鍛える。京都に来てあんまり技術も体力訓練も強制されなかったんですけれど、一番びっくりしたのは平井ポコさんの言ったように山への勉強ということでした。外交―交渉に関して様々な人々が個人の意見をこえてＡＡＣＫの目的のため努力をする、一〇年後二〇年後を見据えてやるというか、ブータンの山を初登頂できたのは一九八五年ですけど、交渉がはじまったのは一九五〇年代です。自分の時代を越えて、未踏峰獲得のために布石を打っておくということが京大らしいなと思いました。今の現役に関しては未踏峰そのものが少ないので、状況がだいぶ違いますけど、山登りの楽しみは先天的・後天的な練習になる技術修得も大切ですが、それにも増して京都で教えられたことは、なにか知的・哲学的なもの、それが京大式山登り固有のものと思います。私自身の最初のヒマラヤは関学の隊付き医師でしたので、登山自体は気楽だったんですが、その後のＫＵＡＣやＡＡＣＫを背負うカンペンチン遠征では初登頂の命題と遭難を起こしてはいけないというプレッシャーがありました。山登り自体は楽しめるんですけど、バックには成功と同時に遭難してはいけないという組織としての大きな責務を感じました。ナムナニは日中友好ですので、山を楽しむことはありますけど、政治的には成功しなくてはならないというのがありましたし、マサコンは現役の隊で私はＡＡＣＫからＫＵＡＣに医師として送られた立場で、安全確保に対するプレッシャーがありました。一九九〇年のシシャパンマの医学登山は、七三～七四年当時のＫＵＡＣ遭難世代の現役が卒業一五年後に手作りのヒマラヤの夢をＡＡＣＫの組織を母体に実現した登山でした。ＫＵＡＣやＡＡＣＫが標榜する「パイオニアワーク」には、登山という地理的な探検の意味のみならず、将来の人類の生き方に関するひとつの提案でもあると思います。シシャパンマはまあ手作りの―未踏峰じゃなかったですけど―夢を実現しました。一九九六年の梅里雪山の再挑戦も、これもリベンジしなくちゃいけない、しかし登れずに帰ってきてだいぶ怒られました。夢もありますけど、非常に大きな責務を背負った登山というのもありました。

高村：ちょっと話が変わりますけど、岩坪さんは、どこをどう叩いたら戸が開くかという知恵を総合することの大切さをいわれているわけで、サルトロの時がそれでした。カラチの大使館で山に興味を持たれ、ハイヤットさんにも会ったりして協力をいただいた古内大使に最後にお礼をもうしましたとき、「高村さん、まだ若いあなたのために言っておくけど、何事もこんな風にうまくゆくとおもわないように」とひとこと言われた。温厚な大使としても京都のネットワークが機能して、自分もそれに協力せざるを得なかったということから、ちょっとこの若造に言うとかないかんなと思われたのでしょう。体ごと一人でぶつかってなにかやるという、僕もそのつもりでしたけれど、やっぱり周りがみんな力を合わせてやってくださったので、私も仮許可証書を持って帰れたということです。（高村補足：古内大使はその後、インドネシア大使として、一九六三年の京都大学西イリアン学術踏査隊にも協力いただいた）

平井：高村が努力したから、まわりのみんなが協力しようという気になったんだ、努力すれば道は開けるというのは本当だと思う。

高村：ありがとうございます。僕が言いたかったのは、京都的なネットワークがあって、そこに僕がポンと放り込まれているわけだけども、見る人が見たらうまいことやりおったなと受けとられた気がするね。

上尾：高村デルファさんが頂上に行けてよかったなと隊員としては思った。途中で具合でも悪くなったら申し訳ないというか。

高村：高所キャンプではすこし高度順応ができなくて二、三回これは危ないなと思いました。とくにC5から早朝出発した二三日は途中で嘔吐し、休むためにザックを肩からはずす途中で落としてしまい、かなり下まで斎藤さんにとりに行ってもらうという失態を演じています。

上尾：ビラフォンド峠でスキーなんかやってるなんて危ないでっせ。

前小屋：当時カカボラジ（ミャンマーの最高峰）登山を梅棹先生を隊長に計画しておりました。梅棹先生が手を尽くしても許可が取れなかった。私は遠征では許可を取ることが非常に大きなウェイトを占めるということを学んだわけですね。その後大学院時代にインド領カシミールに地質調査に行ったことがあります。その許可のために先遣隊になって交渉したことがありました。外務省に行っても取り付く島がなかった。結局、インドの地質調査所と合同して、向こうから隊員が入るという形で、そちらの協力を得ることになり、その上、日本大使館の一級書記官がインド外務省に同道して話を進めたら、すんなりと許可が下りたことがありました。ですから、ポイントを逃したらいけない。打つべき手は全部打ってみるのは当然であるが、特にインド・パキスタンという国はお役所の事務が当時はすんなり進む状況でなかった。権威というものが重い国だったんです。今は変わっていると思いますけど、やはりそういうことを利用しないとなかなかむつかしい面があるんじゃないかと思いますね。

上尾：サルトロのパキスタン側の隊員のその後についてですが。ハイアットさんはその後宇治に滞在していたりしましたので皆で会ったこともあるのですが、実は一九六四年にガネッシュが終わってからひとりでインドからアフガニスタンのカブールに行き、カブールから定期バスに乗ってカイバル峠を越えてもう一回パキスタンに入ったのです。ラホールでハイアットさんのところに電話をかけたが留守でした。しょうがないなと思ってラホールの街の中をうろうろして本屋で本を見ていたらポンポンと肩をたたく人がおるんですよ。あんた上尾とちゃうかというんで見あげたら、バシールでね。ペルベッツもこの近くに住んでるから呼んでくるといって、三人で喫茶店に入って二時間くらい話をしました。その頃は彼らが何をしてたか聴いていないが、ペルベッツは学生で、バシールは航空会社のオフィサー？

岩坪：弁護士になったんじゃなかったっけ。

上尾：そうでしたかね。二年後ですからね。その後誰も会ってないし連絡も取ってないんじゃないかと思いますがね。偶然二人に会うという不思議な経験をしました。

高村：締めというのでもないのですが、ここに参加している院生の人たちのなかにはインドのラダーク地方で食生活や栄養のことを研究するために現地でいろいろな苦労や経験をしている人もおられる。今日は、山のことで私たちはサルトロという山のためにみんなでがんばったという話をしました。しかし皆さんもそれぞれにいろいろ緊張のある経験をし

ていると思う。私のことで言えば、アフリカ研究センター在籍中に、タンザニアの大学と研究協力をすすめようとしたが、おもい通りにすすまない。昔の一途な気持ちがふっとわいてきて、よし私が行こうと出かけましたが、タンザニア、京都の両側で多くの方に助言いただきまた協力してもらい、二年以上かかって、ようやく国際協力事業団（当時）支援による大学間協力が実現しました。それは山登りとは違うけれども、どこか通じるものはあるんじゃないかと思っています。自分が立てたテーマに向かってあっちを突いたりこっちに頼んだりするわけですが、三十年前に経験したことがどこかで活きていたと思う。山だけと違って、人生全般にいろいろ起こってくることを、それこそパイオニアとして乗り切ってゆかれることを期待します。

司会：ということで一応時間になりましたが、ここに今秋インドのザンスカール遠征に行く現役山岳部の諸君も参っておりますので先輩から何か一言。

平井：ザンスカールは誰が行くんですか。

荻原：四回生の荻原宏章、隊長です。

森本：四回生の森本悠介です。

澤田：二回生の澤田佑樹です。

小阪：二回生の小阪花梨です。

司会：荻原くんはこの前ヒマラヤに行ったね。

岩坪：山岳部やＡＡＣＫの伝統いうのはね、守るものと違って、利用するもんやから。

荻原：正直現役は数が少なくて、一昨年根岸隊長のもとでネパールの六〇〇〇ｍの小さな山ですが行かせてもらって、よくこの少ないメンバーで根岸さんは隊長をやったなぁと思うんですけれども、現役は少ないんですが、ＯＢの方々の力と、やはり遠征っていうのを身近なものだと感じられることがすごい大きいということと、今年行かせていただくザンスカールもＯＢの方々の力なしにはとても、まず対象を見つけるところからできなかったというのがあるので、今年は未踏峰を目指しますけど、それもＯＢの方の力とか連綿と受け継がれてきた感覚というのが大きいと思います。

岩坪：募金よろしくって言っておいたら。

上尾：昔と違って今は個人がそこそこ寄付をしてくれますから（笑）

高村：しかし口は出すけど金は出さんっていうんじゃないの（笑）

上尾：前に比べれば費用もそんなにかからないし、回状を回せば集まるんのじゃないの。

平井：で、募金は集まったの？

荻原：一昨年のネパールの残りがありますので……

上尾：そうでしょ、残るくらいに集まるでしょう。同志社などはＯＢ会のシステムがしっかりできていますが、京大山岳部にはそういうのができてないだけの話。

荻原：そこまでいくとおんぶにだっこになってしまうので……

高村：松林先生はだいぶ苦労したでしょ。

松林：今は幸島司郎君が部長として頑張っております。

司会：岩坪さんのおっしゃった、我々の伝統というのは守るものじゃなくて利用すべきものであるという話、ここにはそれをうんと使ってきた方ばっかりが並んでいるわけですから、遠慮することなくこれからもどしどしと利用していただきたいと思います。ゼミの院生の方も含めて広い意味でも、京大というところを気負わんでもいいとは思いますけど、皆さんの研究にお役に立てていただけたらと思います。どうも今日は本当にありがとうございました。会場設定していただいた東南アジア研究所の坂本龍太先生にも本当にお世話になりまして、ありがとうございました。

サルトロ・カンリ登頂五〇周年記念会のために

谷　泰

サルトロ・カンリ登頂五〇年の年には、ぜひその記念会を催してほしいと、つねづね高村さんに言っていながら、実際に五〇周年を記念する集まりの通知を受けたいまになって、こちらのやんごとなき不都合によって、京都まで飛んで行って、会に参加できない。それが口惜しいだけでなく、会を催すのに骨折ってもらった高村さんはじめ皆さんには、なんともすまない気がする。こういう返事を出したら、高村さんから、その代わりになにか短文のメッセージでも送れという連絡を受

けました。そこで、なにを書こう。こう思いつつ、当時のことを思い出すよすがとなる当時の日記兼野帳なるものを、久々に掘り出してみました。すると、意外に記憶のよどみに沈まずに、およそ忘却の淵に洗い流されてしまっていた、興味をひく出来事どもが記されている。五〇周年の記念にちなんで、公式報告には載っていない、こういうことどもを少し書いてみようか。そんなことを思っているうちに、二三日になっているのに気付きました。というわけで、あわてて野帳に記されている、いくつか目に留まることを、とりとめもなく書き連ねることにします。

まず私は、斎藤、平井、上尾さんらとともに、貨物船に乗って約一か月半かけてカラチに赴いたのでしたが、その途上での記録として、わたしが隊の会計責任者であることもあって、香港で笹谷（哲也）べべちゃんの世話になって、円をもって、パキスタン・ルピーを購入する際のことが比較的くわしく記してあります。そこで私は二、〇〇〇、〇〇〇円をもって、二九六、五〇〇香港ドルを受け取り、さらにその香港ドルをもって、三七、七五〇パキスタンルピーを購入しています。もちろんこれは、公定相場ではなく、いわば香港でのヤミ相場ということになるのでしょうが、これで計算すると一ルピー五二・九円と言う割でルピーを購入しています。当時公定レートでは、同じく記録によると七六円ということですから、四〇％あまり公定よりも多くのルピーをえていることになります。これも現在のように、インターネット・バンキングが世界中で普及して、即時に外貨が国際相場で取引できる時代ではありえないことでしょう。それにしても、当時笹谷べべちゃんは、大学を出てさして年を経ていない、香港での修業時代であったと思いますが、すでに若い中国人の手下のような人をもって、英語はもちろん、中国語でテキパキと事をさばいていた。大学に残って、娑婆にもまれずにいるものとはさすがに違うなと感心したのを思い出します。香港の街は、傾きかけたような安普請のビルの窓から、マージャンのパイをかきまぜる音がひっきりなしに聞こえてくるのが印象的でした。

ところでカラチについて、すでに飛行機で到着していた林、高村、岩坪などと合流した日のことだと思います。船長が、お別れとこれからの壮途への激励のためにとセットしてくれたスキ焼パーティを終えて、ホテルに落ち着いた後のことです。ホテルの庭でバンドが音楽を奏で、ダンスをしているのを見て、林さんと斎藤さんとがダンスがしたいと言いだした。そこですでにカラチ事情に詳しい高村さんが、ホテル・エクセルシオというところの階上にあるキャバレーを案内したのでした。果たしてどれだけのものがそこに行ったか、正確に記されていないのですが、林、斎藤、平井、高村、そして私がいたことは確かです。まずはテーブルを囲んでウイスキーなどを飲みながら、金髪女性などのショーをみる。そうこうするうちに、林さんが二人の黒髪の女性を近くに呼び寄せて、ダンスを申し込んでからあと、彼女らはわれわれのそばに座って、親しく酒のサービスをし始める。いやそれどころか、自分らをコカコーラとアガピラウムというギリシャ人であると自己紹介してからは、それこそ何とも可愛げでかつ親しみあるしぐさで、酔い始めていたわたしたちをうっとりと虜にしてしまった。もちろん結婚して間もない平井さんは、もう帰ろうといだすのだが、高村と谷は一向に腰を上げようとせずに、なにか深みにはまってゆくような気配さえ見える。こうして、すでに夜半をとっくに過ぎていたと思うのですが、林さんのきつい掛け声で、ようやく我々は、名残惜しげに腰を上げて宿に帰ることにしたのでしたが、その時の払いがなんと二五〇ルピー、円に換算して二万円余り。当時の大学の助手の一か月の給料が、一万五千円程度であることを考えると、それこそ今なら二〇万円と言ってよいでしょう。カラチ到着早々の浮ついた散財の値段を翌日知った林さんは、お冠りもいいところで、会計係のわたしとして大目玉を食らったのは当然でした。それにしてもダンスにいこうなどと言い出したのは林さんではないかと内心ぼやきもしたのでした。ただこの大目玉のおかげで、私はそれ以後、会計責任者として責務のまっとうに励むことになりました。

ちなみに私は、京都を出発する壮行会のときだったと思います。桑原さんが、『谷、あんたは会計責任者でんな。遠征において、会計ちゅうもんは、絶対に交渉の表に出たらあかん。金の交渉は、常に渉外に任せ、二枚腰で後ろの方で渋い顔しておかんといかんの

や」。こう言われていた。そこで、キャラバンの途中、そして最後のポーターに対する金銭の支払いの時も、すべて値段の交渉は高村さんに任せ、連絡将校はもちろん、親しくかかわることになる高所ポーターたちとも、気心を通じあうことをさけ、距離を置くことに努めた。そのために、「おい、イスマイール」などと親しく呼び掛けて、親しくし合っている他の隊員がややうらやましく感じられたのも事実でした。そして登頂も済ませたあと、カラコラムクラブの遠征費用分担金の最終支払いをめぐる押し問答のときも、高村さんと連絡将校とが間に立って、相手の主張を伝えてくるのに、私は終始むっつり。前もって約束し合った費用分担金（五八〇〇ルピー）のうち、未支払い分（二八〇〇ルピー）全額の支払いをなすべしと、譲歩しない頑固ものに徹した。その功あってか、連絡将校も、パキスタン人としての名誉にかけても、カラコラム・クラブは義務は果たすべきという思いに駆られて、義務遂行を迫った。カラコラム・クラブのハイヤット氏は、遠征分担金を工面するために、政府や会社からの寄付金のほか、たばこやビスケットなどの現物寄付を売って金に換え、支払っているのだと言って、しきりに支払いを渋っていたのでしたが、クラブの会員の一人を登頂させたいま、応分の補助が得られると判断したのか、予想に反して、前もって約束しあった支払いを受けることになる。こうして、国外会計としては大幅の黒字を残すことになったのでしたが、カラチでの散財の不名誉が、それで帳げしになったかどうか。いや、それぞれ別個の話なのでしょう。

それにしても、スカルドからのキャラバンは、それこそインダス渓谷に流れ込む小谷からの水を灌漑することで開いた農地を耕作する、まさに冬雨型乾燥地域の麦農耕民、そして移牧をもって羊・山羊を飼育する西アジアの牧民との最初の出会いでもあり、この経験がわたしにとってのその後の仕事の一つのきっかけを作ることになったことは、のちに考えてそうだと思います。ただ、それとは別個に、道すがら出会う村人、とりわけ子供たちの好奇心に満ちた眼、その無邪気さが思い出されます。もちろんほとんど現金経済の浸透度の低い世界で、衣服も要は大人たちの使い古しの衣服を転用した、しかも継ぎはぎだらけ、まさに襤褸をつぎはぎしたものであるかのようなものを着ていました。そういう子どもが、われわれが村に到着し、キャンプしはじめる小川べりで、顔を洗ったりしているのを見て、石鹸を貸してほしいと言って、頭を洗いはじめる。そこで、おまえの服も垢だらけだから、石鹸で洗ったらと言うと、「そんなもんだりすると、ばらばらにほどけてしまう」といわれて、なんともっともなことだと思ったことが記されています。ヨーロッパでも子供という概念はもちろん、子供服といったものが、ひとつの服のカテゴリーとして成立するのは一六世紀になってからと言われていますが、恐らくこういうつぎはぎのぼろをまとった時代というものが、ついこの間までは、世界の大半の田舎での状況であったのだろうと思います。ところが、最近カラコラム地域に行った人々の写真を見ると、いまや子供も、大量消費社会の子ではないにしても、それなりの服を着て写っている。

なお子供のことでもうひとつ。われわれの隊は、加藤副隊長のご所望で、身の回りを世話するお小姓を雇うことにしたことは、公式記録にも書いてあります。数人の候補者を村で募り、その中から四人のお小姓を選んだのでしたが、その中に加藤さんが最も気に入った子としてシェラールという子がいました。ちなみにかれは選考時、英語はしゃべれるかと聞かれたとき、あまりに緊張したせいもあってか、〝yes, I go is〟と答えて、試験管の笑いを買ったと記されていますが、それこそウルドゥ語の語順に従ってか、『はい、私やれますハイ』の〈ハイ〉のつもりで〈is〉をつけたのでしょうか。いずれにせよ、大変気のつく、利発な子で、シアチェン氷河に入ってからもしばらく、雇われてから三週間加藤さんのもとで、お小姓としての役を十全に果たしたのでしたが、その年齢わずか一二歳。将来どんな人になりたいかと尋ねたら、サーダーのようなハイポーターの長になりたいと言っていたと記されていますが、いまはすでに六〇歳を過ぎているはず。いったいどういう人士になったか。いずれにせよ、子供のことは、その貧しさの中にありながら、きらきらと光るまなこをもった子も少なくなく、彼らの将来のことを思って、種々の思いが記されていました。

氷河にはいってから以後、野帳の記載は、

もっぱら行動をめぐる記録が主になってくるのですが、確かに登頂をめぐる前後の出来事記録は、確かに詳細をきわめています。そこで、斎藤、高村両人が第一次登頂隊員として選ばれるほか、第二登頂隊員としては上尾とわたしが選ばれていることが記録されていますが、確かに、上尾さんも十分体力を保っていた。他方、サルトロの公式報告で加藤さんが、私のことをブルドーザーのように強かったと記しているように、私も七〇〇〇メートルの高所で殆ど頭痛を訴えず、食欲も大いにあったことは確かです。ただそれはおそらくは、平井さんや岩坪さん、高村さんなどが先発偵察隊としてビラフォンド・ラを超えてはやばやとシアチェン氷河に入って行った時期に、私は一人のハイポーターとともに、ビラフォンド・ラ直前のデポ地に残って、峠までの荷あげ、そして峠からシアチェン氷河までの荷降ろしの役を、ほぼ一週間余りかけて担った。そのとき荷あげをして直後、しばらく軽い頭痛を経験し、顔もすこし腫れたのでしたが、シアチェンに降りるとともにそれもひいた。というわけで、なにももともとブルドーザーのように強かったわけではなく、十分の高度馴化をそこで済ませ得たから、再び高所に上がっても、元気でありえたのであろうと思います。

ともあれ、第二登はなされず、下山ということで当初は残念であったのでしたが、いずれにしてもカラコラム、それも高所での経験は、これらの残念な思いを補うに余りあるものでした。その翌年の夏、私はイタリアはローマ空港に降り立ち、そこで一年半余りの留学生生活を送ることになったのでしたが、その時の第一印象は、「ああ、ここにもパキスタンの平原と同じ風が吹いている」という印象でした。じつは加藤さんは、カラコラムに最初に来た時、「ああ、ここにも蒙古と同じ風が吹いている」という印象をもったと述懐していたのを記憶していますが、わたしにとっては、まさに地中海地域から、中近東にかけての連続性をその時強く印象付けられたのでした。そして、あのポプラの梢が風になびき、青く乾燥した空、そして禾本科の草原の広がる世界としての連続性、それは麦、パン、そして羊・山羊の世界としての連続性でもある。

わたしはこういう連続性の糸に導かれながら、その後の仕事を展開することになったのでしたが、サルトロ・カンリ遠征隊の隊員としての経験はこういう点でも、私にとってひとつの重要なその後の方向付けの糸口になったことを、五〇年の後にいま改めて思い返したというところです。

最後に遠方からですが、サルトロ・カンリ登頂五〇周年を記念して乾杯、そして隊員をはじめ出席の皆さんの健康、さらなる成長を祈って乾杯。すでにおられなくなった四手井、加藤、林さんをはじめ、この隊の成立に貢献された多くの先輩たちに、感謝をこめて乾杯。

（イタリア、ベルガモより）

サルトロ・カンリ、インドラサン登頂五〇年を祝う会

さる七月二四日、まさに半世紀前一九六二年の日本・パキスタン合同隊によるサルトロ・カンリ峰初登頂、ならびに同年秋の山岳部現役遠征隊のインドラサン初登頂をあわせた「内祝い」会が、サルトロ隊員の平井、高村、インドラサン副隊長の酒井の呼びかけで、京都河原町のアサヒビアレストランで開かれた。斎藤ワイさんはじめ隊員関係者九名のほか、当時お世話になった方や斎藤世代のOB、歴代のAACK会長に呼び掛けた結果、一一名のかたがたに参加いただいた。

午後六時に開始、まずサルトロ・カンリおよびインドラサン登頂前後のスライドを紹介したあと、長老の中島ダンナ氏の音頭で乾杯、歓談しつつ参会者にスピーチをお願いした。皮きりの挨拶をした隊最長老の斎藤は、登頂時のビバークに触れ、早めに決断して翌日にそなえることができたのは、その二年前の酒井たちのノシャックの経験に学ぶところが大きかった、と振り返った。笹谷ベベ氏には当時のことを話してもらったが、香港に店を構えて間もない時期であるのにサルトロ、インドラサン隊はじめ、京大の平沢総長や東南アジア研究関係の人々など、多くの来訪者を世話されたことをうかがい、改めて感謝した。なおサルトロ隊員でベルガモ在住中の隊員谷から送られたメッセージにも、香港での笹谷ベベ氏のことが記されており、高村から一部

が、肝炎に罹病し登攀に参加できなかった残念さ、また入院中の身であったが林一彦、斎藤両ドクターのお墨付きをえて、大学から参加許可をようやく得たことなど、当時の苦しかったおもいを話した。

この会の当日、寺本ショウ氏には、たくさんのバラの花束をご持参いただき、文字通り花を添えていただきました。またまさに半世紀前にお生まれの、斎藤ワイさんの長女カンリ様には参加くださったうえ、ご自身がデザインされた美しいバッグを引出物としてプレゼントしていただきました。いずれもわたしたち世話役には思いつかない賜り物、心からお礼を申しあげます。

飲み放題とはいえ、ビールのジョッキがそれほど空にならなかったのは年齢相応？

約二時間の懇談のあと田中昌二郎氏の謡曲「羅生門」を締めに、八時過ぎに閉会しました。

おわりにプロジェクターの使用のため、多忙な集中講義の時期にかかわらず、協力してもらった竹田晋也事務局長、会計係りを担当してもらったJAC京・滋支部長でもある田中氏にこの場をかりてお礼を申します。

世話役　平井一正、酒井敏明、高村奉樹（記）

2012年7月24日　京都アサヒビヤホールにて

を紹介した。

インドラサン隊の田中二郎からの、安曇野市で山を眺めて暮らしているが、出席できず申し訳ない、という伝言を酒井が紹介した。次いで幾人かの方がたから当時の思い出などが話されが、前小屋隊員は、サルトロ目指して前年からラホールに留学していたのだ

一九六〇年代アーカイブスの収集整理について

アーカイブス作成委員会　酒井敏明

AACKが一九六〇年代におこなった活動のさまざまな記録を整理、保存するために表記の委員会が発足し、十数隊の遠征について作業を始めたことは、本誌第五八号に発表しました。今年五月二〇日におこなわれたAACK総会では、一四遠征隊の個々について当時の隊員への問い合わせ事項に対する回答をおもな内容とした「質問票」を資料（A5判二五ページ）として配布し、委員会がこれまでにやってきたことを報告しました。

誌上に一から八まで、簡単に記します。

一、次の一四遠征（整理の便宜のために略字を定めて示す）の記録を整理する。

60NSQ　一九六〇年京都大学パミール・ヒンドゥークシュ遠征隊
61SAL　サルトロ・カンリ予備調査
一九六一年
62SAL　日本・パキスタン合同サルトロ・カンリ遠征登山隊
62IND　京都大学山岳部パンジャブヒマラヤ遠征隊
63SUK　京都大学西イリアン学術探検予備踏査隊
64GAN　一九六四年京都大学山岳部ネパールヒマラヤ遠征隊
64KAN　①カンチェンジュンガ・ウェスト登山許可交渉　②ヤルン・カンの登路偵察　③ヤルン・カン登山許可交渉
65TIL　泊山岳会中部ネパール踏査隊
68BHU　一九六七年度京都大学ブータンヒマラヤ遠征隊

68PAT　京都大学探検部アンデス学術調査隊
　チリパタゴニア氷河・古地磁気調査班
69EVE　日本山岳会エベレスト第二次偵察隊
69BHU　京都大学ブータン学術調査隊
70EVE　一九七〇年日本山岳会エベレスト登山隊
70BHU　一九七〇年京都大学ブータン学術調査隊

二、「重要とおもわれる文書・映像・音声・器物などをリストアップし、所在を明確に記録、可能な限りＡＡＣＫ事務局において管理する」ことを方針として作業した。

三、オリジナルの文書、写真、器物などの収集整理を意図したが、亡失したり劣化したりして保存に耐えなくなっているものが多い。

四、収集した資料は最終的にはＡＡＣＫが京都大学文書館および同博物館に申請して恒常的な収蔵と展示が可能となることを希望し、「京都大学研究資源アーカイブ・研究資源化プロジェクト」に予算申請するなど手続き中である。ただし当分の間は仮の場所を確保する必要がある。

五、文書及び写真はオリジナルを保存することにし、別に閲覧・展示用に複製品を作る。器物は選別して保存するべきものは将来の収蔵にそなえ保存し、他は処分することにしている。前者の一例としてのちに「西堀書簡」のことを説明する。遠征隊で使用したテント、通信機など、または、遠征隊の成果を発表する展覧会用に作成した写真パネルなどは、保存・廃棄の判断の対象となる器物の例として挙げることができよう。

六、隊によって相違するのは当然であるが、隊員としてプロジェクトに直接関与した人も、留守部隊として後方から支援した人も、時間の経過とともにあるいは故人となり、あるいは消息を辿りにくくなる場合もあり、申請書・許可証などの第一次資料類が所在不明となり、ノート・写真の保管が十全でないなどの事態に多く直面している。作業開始が遅きに過ぎた感を抱かずにはいられない。そうは言いながらも、もと隊員であった会員またはそのご家族にお尋ねし、結果として、新聞記事切り抜き、写真アルバム、あるいはカラースライド、ビデオテープなどを送っていただくことができた。このように作業はある程度進行している。

七、大きな課題は最終的な保管場所であり、前述のごとく京都大学など公的機関にお願いする際には、資料のすべてについて将来にわたって個人の権利を主張しないことを保証する必要がある。この点は会員もご家族の方も了解していただきたい点である。

八、現在の委員たちの経験に照らしても、一九七一年以降のＡＡＣＫの活動についてアーカイブスの整理・保存の作業を遅滞なく進めるためには、その態勢を直ちに作ることが絶対に必要であり、理事会にそのことを強く要望しておきたい。

　本号別稿に『西堀書簡』を書きましたが、何故今になって取り上げるのかを以下に説明します。

　日本山岳会マナスル登山隊で一九五六年初登頂者の栄誉に輝いた会員今西壽雄さんは一九六九年～八五年に関西支部長を務め、一九八五年～八九年には日本山岳会会長として職務に精励されたことはご存じのところでしょう。没後関西支部事務室の移転があったのですが、事務関係書類の整理がおこなわれたとき、たくさんの手紙を綴じた二冊のファイルが出てきました。これが別稿で『西堀書簡』と呼んでいるものです。

　九〇年代なかばに日本山岳会がマナスル登頂四〇周年記念行事の一環として初登頂時の記録類を整理するなかで、西堀書簡ファイルが関西支部に所蔵されていることがわかり、その閲覧・複写の可否をＡＡＣＫに訊ねてきたことがあります。このとき私たちは初めて、一九五二年の西堀栄三郎先生のインド、ネパール旅行を報告する手紙が綴じて保管されていたことを知ったのです。

　私たちの委員会は一九六〇年代の活動に関連する記録を対象としているので、五二年の西堀ミッションはあきらかに埒外の問題ですが、ＡＡＣＫにとりきわめて重要な書類であるうえ、今対処しないと亡失する恐れがあると判断しました。

　それゆえ当委員会は今年初め以来日本山岳会関西支部長重廣恒夫氏に、これらの手紙がＡＡＣＫにとって重要な記録であり、私たちの委員会は往年の記録類を収集整理しているところなので、ぜひとも閲覧して複製を作りたい、もし可能であれば譲渡していただきたいとお願いをしました。重廣支部長は事情を

理解され、支部のしかるべき会議に諮って賛同を得たうえで、このほど当方に渡してくださいました。アーカイブス委員会としてＪＡＣ関西支部長および役員各位に篤く敬意と感謝の気持ちを表すものであります。

西堀書簡は保存されたときの姿のまま全体を収蔵することを決めました。さらに専門業者の新光社に依頼し、ＣＤ複製版を作成してもらいました。

私は、西堀ミッションの旅行の現実を描き、現地当局者との接触、交渉の重要な局面を具体的に記す『西堀書簡（抄）』を作成するのが適切と考え、委員の皆さんに諮り賛同を得ました。全体で約五〇通（三五〇ページ）の文書からなる「西堀書簡」から、カルカッタ発信往路二通復路二通、ニューデリー発信二通、カトマンズ発信二通、計八通の西堀栄三郎から今西錦司あての手紙、帰国後ネパール皇太子殿下から西堀宛来信一通、同クリシュナ氏から一通の、合わせて一〇通（八三ページ）を選び、手紙そのものを複製します。これに表紙、目次、解説文を付して製本した冊子若干部数を作成するのです。

ＡＡＣＫ保存用として二冊を保管、このほかは、西堀先生ご遺族、ＪＡＣ（東京）、ＪＡＣ関西支部、探検の殿堂博物館に贈呈する計画です。

ちなみに、次の論文は当時のＡＡＣＫが果たした役割を評価し、西堀書簡についても詳しく分析している、内容豊かな作品です。

松田雄一「マナスルへのプロローグ」『山岳』第九一年（一九九六）：二〇～三六

西堀書簡について

西堀栄三郎先生（一九〇二～一九八九）が一九五二年一月～三月インドおよびネパールから京都の今西錦司先生（一九〇二～一九九二）宛に出した一連の手紙約二五通が本来の意味で西堀書簡の名に値するのであるが、帰国後に西堀先生がネパール政府要人宛に出した手紙のコピー、ネパールから受け取った手紙、先生が描いたスケッチやメモ類数点など関連する書類若干をも合わせて、約五〇通弱、総数約三五〇ページを、ここでは一括して西堀書簡と呼ぶ。

古めかしい二穴ばね式の二冊のファイルに綴じた姿で保存され、原則として日付順に配列されているが、書いた日または投函した日が明確でないものが少数あり、スケッチや心覚え風の書付など、どの手紙に同封されていたのかわからないものもある。投函されたすべての手紙が宛先に配達されたかどうか、また、受け取られた手紙がすべてファイルに綴じられたかどうか、今となっては知る由もない。

先生は一九五一年一二月下旬～五二年三月中旬インドおよびネパールを訪問、ネパールヒマラヤの未踏の巨峰マナスル（八一五六ｍ）の登山許可を取得する交渉をおこない、その委細を旅先のホテルで、薄い手紙用紙に万年筆による手書きで書き、航空便で京都の今西先生宛に発送した。

当時は敗戦後六年、日本はサンフランシスコ平和条約が締結された直後で、外貨準備高は乏しく海外渡航は厳しく制限されていた。ＡＡＣＫは戦中および戦後しばらくの間休眠状態にあったが、創設メンバーの今西先生らは一九五一年秋京大生物誌研究会（ＦＦ）を設立してヒマラヤ遠征の実現にそなえる。またまインド学術会議に木原均、藤岡由夫両教授が招待された機会をとらえ、ＦＦは日本政府代表団に随行する形で西堀先生をカルカッタおよびニューデリーに送り込むことを企てる。

先生の旅費はヒマラヤ遠征を後援する毎日新聞社が負担することになり、時期的に渡航審議会をとおすことができず、先生はＵＰ通信社特派員の肩書きでインド到着後同社支店から米ドルを受け取る約束のもとに、無一文で五一年末カルカッタのダムダム空港に着いた。ネール首相ほかインド政府高官に会って日印合同のヒマラヤ遠征計画案を打診、その可能性を探って工作を進めるかたわら、ヒマラヤンクラブ会員数氏に接触して遠征登山の実現に資する多種多様の情報を鋭意収集した。先生はカルカッタに着いてから毎日新聞社運動部竹節作太氏の紹介状を添えてネパール体育協会会長クリシュナ・バハドゥール・ヴァルマ氏に手紙を出し、入国への支援を要請した。

待ちかねた同氏からの返信電報が着いてネパール訪問の道が開け、二月一二日パトナから空路カトマンズ入りを果たした。トリ・プフーバン王、コイララ首相、カイザー・ラナ国防相などとの会見に成功し、マナスル登山

計画を説明して許可を得られるよう懇請する。王様と関係閣僚の好意的対応を得ることができ、許可申請書を作成して提出した。カトマンズ市内と郊外の寺院その他の史跡を訪ね、ヒマラヤの雪嶺を遠望するなどして、第二次大戦後日本人初となった先生のネパール訪問は滞在九日にして終りを告げたが、王家や政権上層部と良好な関係を築き、登山許可取得に有望な感触を得た電撃的訪問であった。

カルカッタに戻ってから、マナスル周辺の地図の取得に努めたが果たせず、シェルパ雇用の事情を調べるためダージリンを訪ね、また、イギリス、スイスなど各国ヒマラヤ登山計画について情報を収集した。Air Survey India社の双発航空機をチャーターしてマナスル山域への空撮をおこなう計画をたて、許可申請書提出、資金手当てなど準備は相当具体的に進めたけれども、最終的に許可がおりず、残念ながら実現できずに終った。

帰国後、ネパールからは、クリシュナ氏の日本留学受け入れをめぐるビクラム・シャー皇太子の推薦状、クリシュナ氏から遠征計画の進捗を問い合わせる書簡などがあり、西堀先生からはＡＡＣＫがマナスル計画をＪＡＣに委譲したことを説明し、今西錦司以下数名の先遣隊隊員の経歴を紹介するなど、その後しばらく書簡の往復は続いた。

ちなみに、最初の手紙はバンコク、ラングーンの空港に寄港してからカルカッタ空港に降り立った五一年一二月二九日？付けであり、最後は五三年三月一九日シンガポール発信のネパール人某氏が東京都調布鵜ノ木町の西堀宅に送ったものである。

京大生物誌研究会からマナスル登山計画を引き継いだＡＡＣＫは、この計画を日本山岳会に委譲することになった。得られる情報がほとんどない未踏査地域に入り登頂のルートを発見するための踏査隊、登山隊別動隊として広域的に活動する科学調査班は西堀先生がカトマンズで政府要人と約束したことで、ＡＡＣＫ主導のもとにおこなうことが決定した。五二年八月～一二月の先遣隊（今西錦司隊長ほか五人）と五三年三月～八月の科学班（中尾佐助、川喜田二郎の両氏）の二つの遠征がそれである。

西堀書簡は全体で手紙類約五〇通、総数三四九ページあるが、先生が旅先から京都宛出した手紙はすべてきわめて薄い用箋に万年筆で手書きされている。日本帰国後に書いた手紙、およびネパール人からの来信はタイプ印字が多い。この手紙一式はもともと今西錦司先生のもとに保存されていて、いつのころからか今西壽雄氏のもとに移ったのであろう。同氏がマナスル第三次登山隊に参加することになり、それを契機として今西錦司先生から今西壽雄氏へ保管者が変わったという筋書きが考えられる。今西壽雄氏は日本山岳会関西支部長（一九六九～八五）、続いて日本山岳会会長（一九八五～八九）を務めたので、この期間に書簡ファイルは関西支部事務室に移されていたものと思われる。一九九五年ごろこのファイルが存在することがわかり、日本山岳会本部からＡＡＣＫに閲覧、複写の可否について問い合わせがあった。

アーカイブス作成委員会では、ＪＡＣ関西支部長重廣恒夫氏に事情を説明し、西堀書簡を譲渡していただきたいとお願いしたところ、同氏は快く支部のしかるべき会議に諮ったうえで、私たち委員会に渡してくださったのである。

ここに経緯を記し、感謝を申しあげる次第です。

会員動向

新入会員

しかし、たんに回顧談をおききするだけではもったいない。このサルトロ遠征がＡＡＣＫの活動に果たした意義を知り、今後のＡＡＣＫの進路を探るために、この遠征後の五〇年間に活躍した次の世代、さらに次々世代の代表にも参加願った。さて現実に座談会を設定するとなると、遠征隊員のほとんどはサンデー毎日でも、若い世代は現役の超多忙。なかなか一同が会する日時が設定できない。そこで参加を願っていた松林会長が一計を案じて、この座談会を自分のゼミのひとコマにして時間と場所を設定していただいた。厚く御礼を申し上げます。さて、実現した座談会。時間の制限もあって十分に初期の目的に達せられたかというと心もとないが、この場の個々の発言が今後のＡＡＣＫ活性への温故知新となってくれれば幸いである。

次号の六三号は一二月発行予定です。応募原稿の締め切りは一〇月二〇日です。

編集後記

五〇年を経て、七割の隊員が健在というサルトロ・カンリ遠征隊は珍しいことかもしれない。そしてそのほとんどの方が京都近辺にお住まいである。そこで本誌を「サルトロ・カンリ初登頂五〇周年特集号」として編むにあたり、遠征隊隊員による座談会を企画した。

発行日　二〇一二年九月末日
発行者　京都大学学士山岳会　会長　松林公蔵
発行所　〒六〇六―八五〇一
京都市左京区吉田本町（総合研究二号館四階）
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
編集人　前田　司
製　作　京都市北区小山西花池町一―八
㈱土倉事務所